

仙台市文化財調査報告書第41集

年 報 3

昭 和 56 年 度

昭 和 57 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第41集

年報 3

昭和 56 年度

昭和 57 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

文化財というと一般に国や地方公共団体が文化財として指定しているものだけを指すと考えている方も多いのではないかでしょうか。本来の意味で文化財とは、「人類発生から今日に至るまで行われてきた生活活動の産物及び長い間人類が生活を営むためのベースとなった自然環境のうちで現代社会において歴史的・学問的価値の高い、人類にとってかけがえのない貴重な共有財産の総称」です。換言すれば、一度失ったら再び得ることのできない先人の築いた知恵の証し及び大自然の生命の証しということができます。したがって、私たち文化財保護行政を推進していく者をはじめ、現代に生きる者全てはこのようなかけがえのない貴重な文化財を次の世代に継承していく使命を負っているわけです。

当委員会では今年度も開発行為に伴う発掘調査に追われながらも埋蔵から一般までの文化財の保護に一定の成果を上げるとともに、数々の行事を通して市民の文化財への関心を一層高めできました。

本書では、昭和56年度に行ってきた文化財保護行政の事業内容の概要報告及び小規模開発に伴う発掘調査概報、そして美術工芸関係の調査概報をまとめたものです。

最後に、当市教育委員会の文化財保護行政に対して今後とも多大な御指導、御協力を賜りますよう御願い申し上げます。

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

目 次

序	
目 次	
例 言	
I. 事業報告	
1. 管理関係.....	1
(1) 一般文化財.....	1
(2) 補助事業.....	2
2. 調査関係.....	5
II. 調査報告.....	12
大野田古墳群.....	13
後河原遺跡.....	29
南小泉遺跡.....	33
仏像彫刻緊急実態調査概報Ⅰ.....	41
仙岳院仏像調査概報.....	46

例 言

1. 本書は、仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係・文化財調査係が昭和56年度に行なった文化財の調査、文化財保護思想の普及・啓蒙活動、文化財保護管理に関する各種事業についての年度報告書である。
2. 調査報告のうち埋蔵文化財関係は、昭和56年度実施した発掘調査のうち独自に概報もしくは報告書にまとめるに至らなかった小規模な発掘調査3件の概報を掲載した。
3. 「仏像彫刻緊急実態調査Ⅰ」及び「仙兵院仏像調査概報」については、仏像彫刻の実態調査終了後本報告書を刊行する計画である。
4. 本書の編集には文化財管理係渡辺洋一、文化財調査係加藤正範・金森安孝・長島栄一があつたが、係員全員の協力をあおいだ。

I. 事業報告

1. 管理関係

(1) 一般文化財

1) 文化財保護委員会

本年は、委員の専門別に建造物・美術工芸ほか8部門の仙台市指定文化財候補物件小委員会が構成され、それぞれの小委員会別に新たな文化財の指定に向けて調査が開始された。また、本年度になって来た発掘調査についてなどの協議も合わせて行なわれた。

なお、同委員のうち仙台市議会代表の西塙凱歌郎委員（昭56.11.11没）、自然科学（地質）担当の奥津春生委員（昭57.1.14没）の二人の委員が逝去され、その後任として浅野繼男委員（仙台市議会代表、昭57.1.1付）が委嘱された。

2) 文化財パンフレット

今年は、昨年までの古建築編に替えて彫刻編の第1回として「仙台市の仏像彫刻I（如来部）」と銘うち、在仙の寺院に安置されている仏像彫刻のうち如来部の主要なものをピックアップして掲載した。また、「仙台市の古建築I（明治以前）」（昭和54年3月31日初版発行）、「仙台市の古建築II（明治以降）」（昭和55年3月31日初版発行）の重版を合わせて行なわれた。

3) 説明板・標柱の設置

今年度は郡山遺跡・正樂寺本堂・保春院墓などの説明板3基、大崎八幡神社大元堂の標柱1基の新設及び、郡山遺跡（地図）、丘本松窯跡の説明板2基、千人塚古墳の標柱1基の補修の計7基の設置を行なった。

4) 土標の設置

市制施行八十八周年記念事業の一環として、由緒ある町名・通名の土標設置を次のとおり実施した。

ショウケイビル前（川町・清水小路）東六番丁小学校前（東六番丁・花京院通）

5) 文化財めぐり

仙台市内にある文化財の児童を通じて、市民の文化財に対する認識を深め、文化財の保護思想の普及をはかるため、第4回（大人対象2回、子供対象2回）の文化財めぐりを下記により実施した。

対象	大人（第1回）	小供（第1回）	小供（第2回）	大人（第2回）
月日	昭56.5.24(日)	7.24(金)	8.20(木)	11.1(日)
コース	東光寺・岩切城	堤町・台原方面	郡山方面	北山・新城方面
講師	小井川和夫 (六城県教育委員会 文化財保護課技術)	佐藤 隆 酒井忠彦 佐藤 郁 成瀬 康	木村浩二 青木一民 長島米一	逸見英夫 (郷土史家)

6) 文化財講座

昭和57年3月6日・13日・20日の三回にわたって「仏像彫刻について」というテーマで下記により実施した。

	第一部講演会(13:30~15:00)	第二部シンポジウム(15:15~16:30)
第一回	講師 岩佐 光崎(東北大学文学部助手) 演目 仏像彫刻について(概説)	司会 渡辺 洋一 佐藤 泰(仙台市博物館学芸員) 新庄屋元晴 岡崎 修子 岩佐 光崎
第二回	講師 渡辺洋一(仙台市教育委員会社会教育課) 演目 仙台市の仏像彫刻	
第三回	講師 新庄屋元晴(宮城県教育委員会) 演目 宮城県の仏像彫刻	小林 広美(アシスタント)

7) 伊達屋敷解体保存工事

昭和55年7月22日付で聖ウルスラ学院より伊達屋敷を寄付採納し、昭和56年6月3日から解体工事を実施、同年8月30日に完了した。現在、燕沢小学校前の市有地に格納庫を建設して保存している。

8) 文化財分布調査

昨年に引き続いて仙台市内にある文化財の基本台帳整備のための確認調査を実施した。

9) 文化財防災施設保守点検

例年のとおり、1月26日の文化財防火デーを中心として、前後に事前査察(昭57.1.20・21・22日の三日間)と防災訓練(昭57.1.26)が行なわれた。

10) 指定文化財の維持管理

昭和56年8月に遠見塚古墳の除草清掃と陸奥国分尼寺跡の樹木剪定、8・9月に各1回陸奥国分寺跡の樹木消毒を行なった。

11) (仮称)原始古代村基本構想事業

昭和55年度に発掘調査された上田上ノ台遺跡の保存とその活用をはかる目的として、今年度より始まった事業で、(仮称)原始古代村の鳥瞰図の作成を行なった。

(2) 補助事業

◎市費補助事業

1) 善應寺開山堂修理事業

仙台市指定有形文化財善應寺開山堂(昭43.2.15指定)の漆喰壁が6月の長雨の際破損したため、その災害復旧事業として、壁の補修工事が行なわれた。

◎県費補助事業

1) 指定文化財管理事業

国指定文化財の大崎八幡神社・仙台東照宮・陸奥国分寺薬師堂の三件について、防災施設保守点検、小修理といった維持管理に対しての補助が行なわれた。

2) 無形文化財保存事業

宮城県指定無形文化財の館山甲午氏（平曲技術保持者）、甲出綏郎氏（精好仙台平技術保持者）、及び大崎八幡神社能神楽（無形民俗文化財）保存会の二人一団体に対し「技術保持に対する補助が行なわれた。

◎国庫補助事業

1) 仙台東照宮防災事業

文化庁建造物課の指導のもとに、仙台東照宮の施設に対し、火災報知設備、避雷針設備、放水銃等の消防設備の総合防災設備の設置工事が行なわれた。

2) 史跡陸奥国分寺跡土地買上げ事業

目的：史跡陸奥国分寺跡の保存保護を図るため、史跡指定地の公有化を図る。

土地公有化の実績：土地の公有化は昭和43年度から着手し、昭和56年度末まで社寺所有地を中心として主要堂塔跡約175.50m²の公有化を実施している。

今年度の事業：今年度は、東辺築地上と南辺築地上の民家各一棟と國分寺宝物館宝物館敷地、准胝觀音堂周辺の土地合せて2250.5m²の公有化を実施した。

今後の事業予定：昭和57年度は民家3軒について買上げを予定している。今後の事業の最終目標は史跡指定地内全域の公有化を図ることであるが、現実には諸条件がからむため困難が多く、現状変更に伴う買取り請求の都度対応していくなど、段階的にすすめざるを得ない。

3) 史跡遠見塚古墳土地上げ事業

目的：史跡遠見塚古墳の保存保護を図るために公有化し、合わせて市民の活用に供するため、史跡にふさわしい状態に整備する。

土地の公有化：当初指定面積17,500m²の一部バイパス用地約50m²を除き、昭和43年度から昭和48年度までに買収が完了している。今年は昭和55年度に追加指定された主軸線北西部444.66m²の公有化を実施した。このことにより、史跡指定地内の買収はバイパス用地を除き、全て完了した。

今後の事業予定：今後は、古墳周辺部東側の整備と埴丘部の整備工事が残されるのみとなり、昭和57年度は古墳主体部の発掘調査と後円部の土盛り工事を実施する予定である。

4) 郡山遺跡他の発掘調査事業

郡山遺跡範囲確認調査

本年度は昭和55年度から開始された緊急範囲確認調査5ヶ年計画の第2年次にあたる。55年度に発見された推定方四町外郭の南辺・南西コーナーに引き続き、東・西・北の外郭線確認調査と、推定方四町官衙域の南外側に位置する古瓦散布地を中心とする地区の遺構確認調査を目的に発掘調査を実施した。発掘調査は7月22日より12月28日まで行われ、調査面積は1,310 m²である。調査の結果、推定方四町官衙城は北辺を除く外郭各辺が明らかになり、南辺櫛木列は四町（428 m）であることが確定し、西辺で新たに検出物跡が1棟発見された。また、古瓦散布地からは東西長32m以上にも及ぶ版築基壇が発見され、多量の瓦に混じって鶴尾の破片が発見されたことから寺院の中核部であると考えられるに至った。さらに方二町と考えられる寺域の東側では大形の井戸跡内より多数の土器・瓦・鶴尾に混じって、寺院に関係したとみられる木簡が3点発見され、遺跡が7C末～8C初めの官衙と寺院によって構成されていたことが明らかになった。

北前遺跡範囲確認調査

仙台市山田字北前に所在する縄文時代の集落遺跡で、農地改良に伴い、遺跡の範囲確認を目的として発掘調査を実施した。発掘調査は9月1日より12月28日まで行なわれ、調査面積は1,322m²である。調査の結果、山石器時代前期・後期、縄文時代早期・前期・中期、平安時代、江戸時代後期の各時期の遺構が発見され、長期間にわたる複合遺跡であることが判明した。発見された遺構は竪穴住居跡12棟、竪穴遺構1基、土塙69基、溝跡8条、工房跡1棟などである。

前期旧石器の存在が、県内では山田上ノ台遺跡、座敷乱木遺跡（岩出山町）に次いで確認され、山田上ノ台遺跡と隣接していることから、両者の一体性が伺える貴重な発見となった。また、縄文時代早期に属するとみられる竪穴住居跡が8棟発見され、これまで資料が非常に数少なかったこの時期の集落遺跡や遺物を考える上で、大きな成果をもたらした。

仙台平野の遺跡群発掘調査

仙台平野に分布する遺跡群にかかる個人の小規模な開発（個人住宅の建築等）に伴う発掘調査を目的とした第1年次にあたる。今年度は提出された発掘届の中から、堤町窓跡B地点、史跡陸奥国分寺跡、上野遺跡、郡山遺跡（4件）の4遺跡7件について発掘調査を実施した。発掘調査は8月より12月にかけて行われ、調査面積は124 m²である。調査の結果、既に煙滅していたと考えられていた堤町窓跡B地点からは、窓に関する土塙、ピット、溝跡が検出され、多くの瓦、土器が出土し、陸奥国分寺などに瓦を供給していたことが確認された。他の3遺跡の調査でも、遺跡の範囲・性格把握という点で大きな成果を得ることができた。本事業は、年々増加しつつある遺跡の発掘届に対して行政的に対処していくために、貴重な事業といえる。

2. 調査関係

(昭和56年度) 埋蔵文化財発掘調査事業概要

昭和56年度の発掘調査事業は、公共事業関連では仮称西中山小学校建設工事に伴う栗遺跡の調査、大形体育館建設工事に伴う山口遺跡の調査、高速鉄道南北線建設工事に伴う六反田、泉崎浦、仮称下ノ内遺跡の調査と山口遺跡の範囲確認調査、下水管埋設工事に伴う岩切畠中遺跡の調査、青葉学園建設工事に伴う南小泉遺跡の調査、都市計画街路川内～南小泉線の建設工事に伴う南小泉遺跡の調査、茂庭同地造成に伴う梨野A遺跡の調査がある。

民間開発事業（個人開発を含む）では、今泉城跡、燕沢遺跡、郡山遺跡の調査を実施した。また、国庫補助関連の事業としては、郡山遺跡の緊急範囲確認調査（5ヶ年計画の2年次）、北前遺跡の農地改良に伴う調査、仙台平野に分布する遺跡内の小規模開発（個人住宅等）に関連する調査があり、それぞれに調査成果を上げることができた。

①栗遺跡は、名取川の形成した標高9m前後の自然堤防上において、古墳時代後期（栗圓式期）に属する堅穴住居跡23軒の検出。

②山口遺跡では、奈良～平安時代の住居跡の発見と縄文、弥生時代の包含層の確認。

③沖積地に位置する仮称下ノ内遺跡は縄文時代後期、平安時代の堅穴住居跡の発見。

④今泉城跡では、城館に關係すると考えられる、鎌倉時代後半～室町時代にかけての掘立柱建物跡、内堀と思われる堀跡、井戸跡、溝等の検出。

⑤南小泉遺跡では、古墳～平安時代の集落跡が発見され、中でも平安時代の住居跡に伴う貯蔵穴から多くの墨書き土器が出土した。

⑥梨野A遺跡では、縄文時代後期の堅穴住居跡が発見され、史跡公園建設のための貴重な資料を得ることができた。

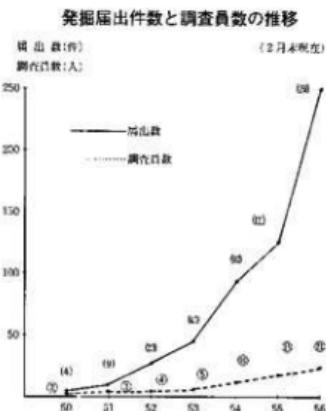
⑦燕沢遺跡では、掘立柱建物跡の発見と瓦の出土から、今まで考えられていた官衙か寺院跡の可能性が強くなった。

⑧郡山遺跡は、東辺と西辺に棚木列と大溝が発見され、南辺長428m（一町=107m）であることが判明し、西辺では方四町コーナー部以外にも、構建物が設計されていたことが確認された。官衙城南方の調査では、方二町の寺院城と考えられる区割があり、その中央部分から、寺の講堂もしくは、僧房と考えられる版築の基壇建物跡が発見された。また、この中央地区には鶴尾のせられている建物があったことが確認された。寺院城東辺部では、堅穴住居跡が集中し、この地区の井戸跡から寺院に關係する木簡が3点発見され、1点は写經の際に使用された「定木」であることが確認された。来年度は、官衙域内の調査を予定しており、多賀城以前の古代東北の歴史を解明する点で、大きな成果を提供してくれるものと期待される。

⑨北前遺跡は、縄文時代早期堅穴住居跡8軒が検出され、集落構造を知る重要な資料を得た

こと。また、台地を覆う赤褐色火山灰とその下層の調査も行われ、旧石器時代の文化層が確認され、その中に、前期旧石器時代文化層の存在が判明したことにより、この遺跡は遠く前期旧石器時代から、縄文時代を経て平安・江戸時代に及ぶ、複合遺跡であることが確認された。

等々大きな成果を得ることができた年といえよう。しかし、こうした成果の裏には、年々増え続ける発掘届にも見られるように、仙台市内に分布している埋蔵文化財包蔵地は、年毎に開発により破壊されてきている。先人の残してくれた文化遺産を保存、活用して後世に残していくことが、ひとりひとりに課されている任務であると考える時、残された遺跡を破壊からいかに守っていくかが、文化財保護行政上重要な課題といえよう。



昭和56年度発掘調査の概略

遺跡名	時代	種類	面積(m ²)	実支会場(㎡)	調査期間	担当職員	備考	
都山遺跡	古墳末期～奈良	宮殿・寺院跡	—	1,310	7/22～12/28	木村、吉沼、長島	第38号	
北野遺跡	前剝旧石器～江戸	集落跡・生活層	2,500	1,320	9/1～12/26	佐藤(洋)、高野	第36号	
仙台平野の遺跡群	—	—	—	1/4	9/22～12/25	細藤、金森、長島	第37号	
栗童跡	古墳後期	集落跡	17,000	4,700	4/13～10/2	工藤、武藏、木村、青沼		
南小泉遺跡	古墳・平安	集落跡	4,500	1,500	4/13～9/3	結城、渡辺(忠)	第35号	
燕沢遺跡	奈良・平安	古墳・墓葬跡	1,100	720	4/14～6/19	渡部・長島	第39号	
今泉城跡	縄文～江戸	城跡他	1,375	718	4/7～9/7	佐藤(洋)、東野		
山口遺跡	縄文中期～平安	集落跡	20,000	9,000	56.3%～57.4%	木村、土井、成瀬、結城、工藤、渡部		
印中遺跡	古墳～中世	集落跡	600	600	10/27～12/9	金森、加藤		
型野A遺跡	縄文中期～平安	集落跡	2,400	300	4/13～9/4	佐藤(甲)		
郡山遺跡	古墳末期～奈良	宮殿・寺院跡	1,130	400	8/31～10/28	青沼、木村		
南小泉遺跡	平安	集落跡	6,600	3,500	56.3%～57.4%	渡部、渡辺(忠)、結城		
古墳群	六反田地区	縄文・古墳～平安	墓葬跡	450	450	56.3%～57.4%	佐藤(強)、荒井	
古墳群	山口地区	縄文中期～平安	集落跡	780	780	8/25～12/28	吉岡、高橋	第40号
古墳群	下ノ内地区	縄文・古墳・平安	集落跡	1,400	1,400	56.3%～57.4%	細野、佐藤(強)、仲藤(強)、内田、東井、高橋	

昭和56年度現状変更届出件数

	遺跡名	所在地	原図	面積(m ²)	対応	遺跡の性格
1	史跡 陸奥国分寺跡	仙台市木ノ下の善地内	都山公園公衆便所設置	7.44	発掘調査	寺院跡

昭和56年度発掘届(通知)一覧

昭和57年2月25日現在

監修番号	遺跡名	所在地	面積	発掘面積(m ²)	測定	遺跡の性質
1 C-136 要	中田町字垂66	住宅新築	217.33	や全い活	立地・平安時代墓葬跡	
2 C-206 約 場	郡山市約場55-15	*	139.19	*	立地・平安時代墓葬跡	
3 C-233 山 口	宮城県宇都宮市2-2	*	370.00	*	繩文～平安時代墓葬跡	
4 C-193 止山とノ谷	山田市西野町3番地	*	650.00	試 挖	旧石器・繩文～平安時代墓葬跡	
5 C-202 皋 塚	宮城字伊藏の2-1	*	139.00	立地・活	立地・平安時代墓葬跡	
6 C-507 今 東 域	今泉久保山103-6	*	116.00	試 挖	城跡	
7 C-105 神 明 社	神江7番	*	169.00	*	宮殿跡	
8 C-506 井 田 域	井野字前西144	*	316.00	*	城跡	
9 C-104 郡 白	郡山市白石町5番地	*	83.00	*	官衙跡	
10 C-507 今 久 造	今泉久保山103	*	136.00	*	城跡	
11 C-104 郡 山	郡山市三丁目22-4	住宅新築	50.00	*	官衙跡	
12 C-193 山 田 とノ谷	山田市とノ谷22番地	住宅新築	365.00	立地・活	近石器・繩文～平安時代墓葬跡	
13 C-105 郡 山	郡山市三丁目10-13	*	42.00	試 挖	官衙跡	
14 C-102 南 小 京	荒見堀一丁目10-3	*	176.00	立地・活	弥生～古墳時代墓葬跡	
15 C-144 浅 田 通	山田字御用通	宅地造成	4,578.00	試 挖	立地・平安時代墓葬跡	
16 C-105 西 合 堀	郡山市二丁目2-1	宅地造成	7,050.00	立地・活	平安時代墓葬跡	
17 C-507 今 久 造	今泉久保山103-7	住宅新築	115.00	試 挖	城跡	
18 C-507 今 久 造	今泉久保山103-71	*	125.00	*	*	
19 C-507 今 久 造	今泉久保山103-8	*	118.00	*	*	
20 C-193 由 田 とノ谷	山田市とノ谷23-1	*	287.00	立地・活	近石器・绳文～平安時代墓葬跡	
21 C-505 北 吉 城	郡山市北吉田町34	宅地造成	1,000.00	*	城跡	
22 C-234 烏 田 収	六丁目字田所山5-3, 6-1	宅地造成	1,419.00	*	古墳時代の墓葬跡	
23 C-183 千 小 金	金生一丁目4-33	住宅新築	248.00	立地・活	羽林・平安時代墓葬跡	
25 C-102 南 小 京	高田字上野原4-2	*	396.00	試 挖	平安時代墓葬跡	
25 C-102 南 小 京	高田字下野原82-1	*	236.00	*	住宅・古墳時代墓葬跡	
26 C-102 南 小 京	達見堀一丁目10-1	*	336.00	試 挖	*	
27 C-105 郡 山	郡山市五丁目2-10	住宅新築	30.00	立地・活	官衙跡	
28 C-115 天 築 園	大野田字青竜2-29	はなえティセンター建設	536.00	試 挖	绳文～平安時代墓葬跡	
29 C-102 南 小 京	達見堀一丁目176-1	住宅新築	168.00	立地・活	弥生～古墳時代の墓葬跡	
30 C-194 井 金 山	宮城字金沢町94-2	*	180.00	*	近石器時代墓葬跡	
31 C-105 南 小 京	荒見堀一丁目30-2	共同住宅新築	160.00	試 挖	弥生～古墳時代墓葬跡	
32 C-108 上 野	宮田字上野原49-14	住宅新築	118.00	立地・活	绳文時代墓葬跡	
33 C-104 郡 山	郡山市三丁目26-2	飲食店新築	166.00	試 挖	官衙跡	
34 C-104 郡 山	郡山市三丁目11-17	住宅新築	736.00	*	官衙跡	
35 C-135 33 ジ 墓	道ノ瀬1-3.169-1-3.170-1-3 分 墓	*	2,591.00	572.00 調査予定	立地・平安時代墓葬跡	
36 C-104 郡 山	郡山市三丁目2-11	住宅新築	115.00	試 挖	官衙跡	
37 C-501 佐 々 城	川内郷鶴鳴番地	*	37.00	立地・活	城跡	
38 C-205 佐 沢	中田町字前原19-1, 20, 40	賃貸住宅新築	1,561.00	試 挖	立地・平安時代墓葬跡	
39 C-101 佐 沢	宮城字上野原13-2	宅地造成	431.00	*	绳文～奈良平安時代墓葬跡	
40 C-415 大 連 佐 墓	東山台82-95	住宅増築	29.00	立地・活	墓 跡	
41 C-604 伊 進 家 墓	向山一丁目1-19	*	18.00	試 挖	墓 跡	
42 C-113 佐 久 京	西山一丁目4-10	住宅新築	76.00	立地・活	平安時代墓葬跡	
43 C-531 佐 有 野 墓	宮田字船岡57	住宅埋葬	62.00	*	城跡	
44 C-102 南 小 京	達見堀一丁目27-14	住宅新築	99.00	立地・活	弥生～古墳時代の墓葬跡	
45 C-115 佐 有 野 墓	大野田字竹松18-7	住宅新築	99.00	立地・活	绳文～平安時代墓葬跡	
46 C-514 田 分 墓	東町南字田170, 172	事務所付住宅新築	220.00	*	城跡	

登録番号	造跡名	所在地	原状	面積(m ²)	地質	造跡の性格
47	C-102 南 小 島	鹿児島市丁目126	住宅新築	164.***	立 金 い 潟	弥生~古墳時代の墓葬跡
48	C-415 大 道 住 宅	東山町六丁目13-20	*	101.**	*	道路
49	C-501 住 合 墓	川内追還無古地	*	38.***	*	道路跡
50	C-234 附 屋 敷	六丁目平尾敷前22-1	事務所新築	1,806.**	試 掘 測	古墳時代の墓葬跡
51	C-102 南 小 島	古城二丁目1-7、1-24	店舗住宅改修	126.**	立 金 い 潟	弥生~古墳時代の墓葬跡
52	C-103 南 小 島	鹿小路四丁目85-1,90-3~7	共同住宅建築	906.***	試 掘 測	*
53	C-104 郡 山	鹿山町丁目13-16	住宅増築	7.**	*	官衙跡
54	C-104 郡 山	鹿山町丁目148	住宅新築	115.**	*	发掘調査跡
55	C-104 郡 山	鹿山町丁目6番地内	下水道事業	44.**	立 金 い 潟	*
56	C-501 徒 古 駅	川内追還無古地	住宅新築	40.**	*	城郭跡
57	C-188 北 星 敷	六丁目平尾改30番地	引き手移転	1,834.***	*	奈良~平安時代墓葬跡
58	C-109 A 末 田	鹿児島市八洲町12番地8,9,10,12	跡取り住宅改築	1,120.**	*	绳文時代墓葬跡
59	C-136 葉 西	西町丁目15番	宅地造成	2,834.**	*	古代墓葬跡
60	C-408 仲 明 社	横川132-1	事務所・店舗住宅建築	122.***	*	古代墓葬跡
61	C-109 A 末 田	鹿児島市末田山1-26	住宅新築	64.**	*	绳文時代集落跡
62	C-225 鹿 島	鹿生町鹿島1番50番地内	*	234.**	*	平安時代墓葬跡
63	C-104 郡 山	鹿山町丁目7-16	**	84.**	*	官衙跡
64	C-506 沖 野 崩	野野子御園88-16	*	82.62	立 金 い 潟	中世~近世
65	C-233 山 口	高瀬内一丁目53-1、2	*	49.**	*	绳文~平安墓葬跡
66	C-104 小 田 井 佐 久	小田井町丁目107-4	*	126.**	*	古代~道路
67	C-136 海 ノ 嵐	野切木澤ノ峯33-20	*	109.**	*	奈良~平安時代墓葬跡
68	C-102 南 小 島	古城二丁目19	倉庫建築	330.**	*	弥生~古墳時代墓葬跡
69	C-136 葉 中	中田町七丁目20-9	住宅新築	277.**	*	奈良~平安時代墓葬跡
70	C-224 鹿 ト	鹿屋市鶴谷1番18号	*	184.**	*	*
71	C-536 四 角 丸	西郡大字戸ノ内24-2	*	84.**	立 金 い	中世耕跡
72	C-404 小 田 井 佐 久	小松島二丁目3-51	住宅建築	50.**	立 金 い 潟	奈良~平安時代墓葬跡
73	C-102 南 小 島	鹿児島市二丁目305-29	住宅建築	81.**	*	弥生~古墳時代墓葬跡
74	C-183 牛 小 合	雄牛一丁目35-3	仓库新築	99.**	*	兔跡
75	C-104 郡 山	鹿山町六丁目238-1、236	宅地造成		发掘調査済	官衙跡
76	C-104 薩 古 嶺	鹿山町丁目20番地内	ガス本管敷設	15.** 4.**	立 金 い 潟	古墳時代~奈良~平安時代墓葬跡
77	C-148 鹿 滋	鹿山字八幡41	住宅新築	62.**	*	绳文~弥生時代住居跡
78	C-133 沖 ノ 嵐	野切木澤ノ峯60-1	*	330.**	試 掘 測	奈良~平安時代墓葬跡
79	C-208 後 沢 原	小町町内13-6、3-17	*	49.**	立 金 い 潟	*
80	C-108 上 野	高田町上野中15-3、5	*	198.**	*	绳文~鹿浜跡
81	C-104 郡 山	鹿山町丁目91-5	住宅建築	23.**	試 掘 測	官衙跡
82	C-104 郡 山	鹿山五丁目225-4	*	195.**	立 金 い 潟	*
83	C-107 土 乎 内 裏 証	土乎内 丁目16	宅地造成	556.**	試 掘 測	京良~平安時代墓葬跡
84	C-141 片 崎	鹿児島市葛北42	住宅新築	63.**	立 金 い 潟	绳文~奈良~平安時代墓葬跡
85	C-221 鹿 ト	鹿屋市鶴谷一丁目23-1	*	117.**	*	奈良~平安時代墓葬跡
86	C-102 南 小 島	古城二丁目311-1	学校建築	2,900	发掘調査中	弥生~古墳時代墓葬跡
87	C-404 小 田 井 佐 久	小松島二丁目109-39、110-20	住宅建築	77.**	立 金 い 潟	奈良~平安時代墓葬跡
88	C-109 A 米 田	鹿児島市米田山142-30	*	102.**	*	绳文時代聚落跡
89	C-213 戸 ノ 内	因形大字戸ノ内12-1、2	宅地造成	5,542.**	開拓代官室	奈良~平安時代墓葬跡
90-108	C-141 具 備 沢	鶴ヶ峰字佐野原施内	住宅新築	226.**	官衙跡	
110	C-104 郡 山	鹿山五丁目150番2	住宅新築	421.**	*	奈良~平安時代墓葬跡
111	C-135 沖 ノ 嵐	野切木澤ノ峯71-1	住宅新築	431.**	*	奈良~平安時代墓葬跡
112	C-224 鹿 ト	福富字鶴谷一72-17	店铺増築	58.**	*	*

登録番号	遺跡名	所在地	面積	開発面積(m²)	性質	遺跡の性格	
113	C-103 桜山新田	霞ヶ浦宇陀地19番地の1	住宅建築	106.**	立合・清	弥生時代墓葬跡	
124-C25	C-141 石浦沢	鷹・谷宇佐野坂内	住宅建築	*	*	魏文・奈良・平安時代墓葬跡	
126	C-102 南小泉	古河三丁目36番地	*	112.**	立合・清	弥生・古墳時代墓葬跡	
127	C-429 六所東	荒学字下木松1-1	宅地造成	26,631.**	試験	築跡	
128	C-233 木田町	横川町二丁目180-1,181,184	住宅建築	115.**	立合・清	平安時代墓葬跡	
129	C-428 鶴鳴山	鹿島二丁目114-74,262番	宅地造成	835.**	是認	平安時代墓葬跡	
130	C-514 田分賀	路原3-1	共同住宅建築	872.**	立合・清	中世建築	
131	C-102 南小泉	古河三丁目2-9,2-9-5	作業所建築	211.**	*	弥生・古墳時代墓葬跡	
132	C-434 荒見御園跡	御園二丁目5-10	住宅建築	179.**	*	元廻跡	
133	C-102 南小泉	荒見坂二丁目222-12	*	82.**	*	弥生・古墳時代墓葬跡	
134	C-108 落合	水波字芋谷31-4-13	*	92.**	*	土塁跡、ハニラ散布地	
135	C-002 守塚古墳	日向町15-1	機工事	125.**	立合・清	古墳	
136	C-223 桜田町	福井町二丁目109	住宅建築	16.**	*	平安時代墓葬跡	
137	C-505 北日向村	鹿島字原ノ内30-1の一部	住宅建築	1,993.**	*	中型・近畿式	
138	C-411 宮守寺水場跡	新町1-7-1	改善共用施設	351.**	立合・清	築跡	
139	C-421 七ヶ宿駅跡	蓮池字七手下中18の2	幼稚園跡	596.**	*	仙台東北丘陵	
140	C-223 桜田町	福井町二丁目120-1,125,126	作業所建築	26.**	立合・清	平安時代墓葬跡	
141	C-511 お竹城跡	古城二丁目5-3	國家公務員令合宿設	149.**	立合・清	地盤跡	
142	C-501 仙台城跡	川内通通番所跡四番七町	住宅建築	62.**	立合・清	*	
143	C-102 南小泉	遠見坂二丁目22-10,47	住宅建築	18.**	立合・清	弥生・古墳時代の墓葬跡	
144	C-514 田分賀	櫛田18番及18番3号	マンション建築	392.**	試験	築跡	
145	C-102 南小泉	遠見坂二丁目22-15	住宅建築	286.**	立合・清	弥生・古墳時代の墓葬跡	
146	C-102 宮山	山田三丁目19-23	住宅建築	99.**	立合・清	古墳時代・	
147	C-104 山	山田五丁目10-8	住宅建築	30.**	立合・清	弥生・古墳時代の墓葬跡	
148	C-234 鶴今	1	日向字大原1-8,2-1,2-2,2-3,2-4,2-5,2-6,2-7,2-8,2-9,2-10	住宅建築	136.**	*	平安時代墓葬跡
149	C-604 佐野の遺跡	豊見坂324番地	恐物細・宮城県再建	338.**	早掘廻塗跡	伊達家廻塗跡	
150	C-109 大森山	尻尾字人来山	住宅建築	92.**	立合・清	魏文時代墓葬跡	
151	C-204 岩城	中戸字宿沖19-3	*	52.**	立合・清	奈良・平安時代墓葬跡	
152	C-306 後河原	川内通駒形新地54番	住宅建築	53.**	*	地盤跡	
153	C-024 丹羽石塚	霞ヶ浦字南80石	水道汎水渠網調査地	100.**	試験	*	
154	C-511 お竹城	古城二丁目1-1	宿舎所建築	572.**	*	城跡	
155	C-105 西谷	鶴山一丁目16-15	住宅建築	15.**	立合・清	弥生時代墓葬跡	
156	C-501 鶴谷	川内通駒形新地54番	住宅建築	46.**	*	城跡	
157	C-505 北日向	郡山通駒形新地388,389	*	70.**	立合・清	*	
158	C-206 伊豆	伊豆字山原ノ内5-1	事務所建築	114.**	立合・清	城跡	
159	C-102 南小泉	遠見坂二丁目77番地	住宅建築	156.**	立合・清	*	
160	C-101 西	青荷字山崎483-4	*	146.**	立合・清	弥生・平安時代の墓葬跡	
161	C-501 お竹城	郡山町5丁目1-1	食事喫茶	25.**	立合・清	城跡	
162	C-102 西谷	郡山二丁目44-1倍7番	マンション建築	7,748.**	ソラナガモト ソラナガモト	魏文・奈良・平安時代墓葬跡	
163	C-103 鶴山	鶴山五丁目26-1	住宅建築	39.**	試験	古廻跡	
164	C-234 朝日町	鶴山町二丁目194-1	住宅建築	11.**	立合・清	平安時代墓葬跡	
165	C-305 佐野城	内野字23番地	仓库建築	32.**	*	城跡	
166	C-106 南小泉	遠見坂二丁目26-2,45	住宅建築	74.74.**	立合・清	弥生・古墳時代の墓葬跡	
167	C-197 六反田	多摩川字原野2-3,27-2	4馬連共用住宅建築	364.**	*	魏文・平安時代墓葬跡	
168	C-228 桜田町	仙台町二丁目3178	住宅建築	112.**	立合・清	平安時代墓葬跡	

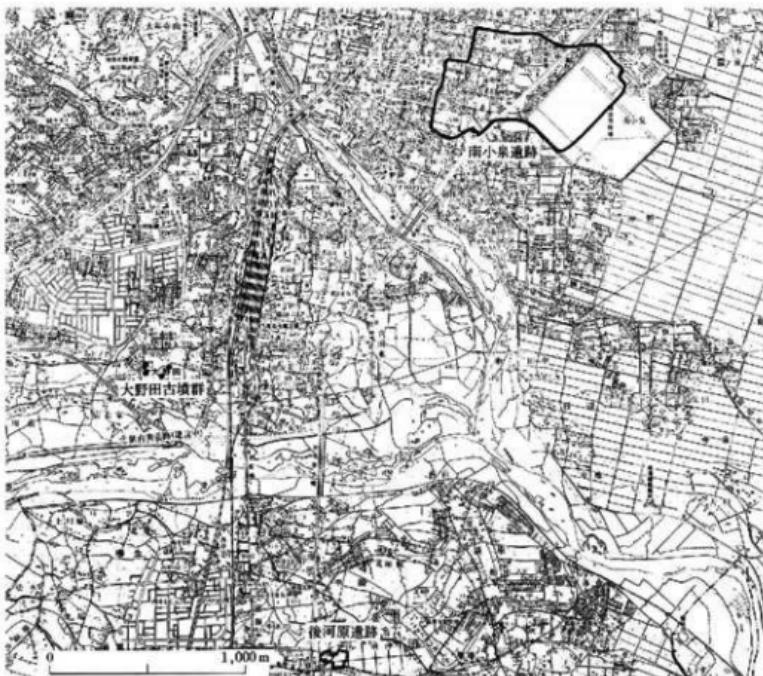
登録番号	遺跡名	所 在 地	面 积	基盤面積(㎡)	地 質	遺跡の性質
169	C-141 墓 墓 池	吉松字吉澤浜西8番2茅	住宅建築	61.06	立食い溝	绳文-奈良-平安時代墓葬跡
170	C-102 墓 小 島	道見原二丁目22-14,27-2	*	59.**	*	弥生-古墳時代の墓葬跡
171	C-109 墓 小 島	南小島町66, 22	*	100.**	*	*
172	C-102 墓 小 島	達見原二丁目187-1,2-3	*	84.**	*	*
173	C-224 無 館 I	高室字御幸1番92-2	*	135.**	*	平安時代墓葬跡
174	C-226 住 子	田子字三沢59号	住宅建築	205.**	試、墓、溝	平安時代墓葬跡
175	C-236 住 丁	田子字坂原前6地	*	312.**	*	*
176	C-223 住 田 町	横山町二丁目27-3	住宅建築	14.**	立食い溝	*
177	C-081 土 下 内 横 六	土手内横6 土手内-15, 120外	砂防工事	1,548.**	*	横六
178	C-224 住 飯	飯室字稻谷1番	深窓所壁塗	1,838.**	試、鍬	平安時代墓葬跡
179	C-102 住 小 泉	古城三丁目10-35	事務所付住宅櫛状	103.**	立食い溝	弥生-古墳時代の墓葬跡
180	C-104 駐 山	駒山二丁目4番6号	小路改修工事	370.**	立食い溝	古面跡
181	C-301 住 古 城	川内原町生57号	住宅建築	58.**	*	城跡
182	C-404 住 小 松	小松町三丁目40-76	*	95.**	立食い溝	溝
183	C-109 住 田	鹿庭下人来田山142-18	*	55.**	立食い溝	绳文時代墓葬跡
184	C-201 住 大 城	川内西野町155, 160	*	65.**	立食い溝	地盤跡
185	C-135 池 / 墓	豊切字宇ノ原33-9	*	237.**	立食い溝	奈良-平安時代墓葬跡
186	C-108 上 野	富山市上野町16-1, 16-7	*	95.**	*	魏晉時代墓葬跡
187	C-109 住 丹波、八坂山 城	長町町下丁目京浜・3丁地内	下水管道設	200.**	*	绳文-平安時代墓葬跡
188	C-102 住 小 泉	達見原二丁目7番37号	住宅建築	67.**	立食い溝	弥生-古墳時代墓葬跡
189	C-208 住 河 西	中和字御井20-45-5	*	850.**	*	夕張-平安時代墓葬跡
190	C-104 住 山	山町山1丁目地内	水路改修	試、鍬	古面跡	*
191	C-201 住 沢	沢野字神柳75-8	住宅建築	35.**	立食い溝	城跡
192	C-514 国 分 寺 鎮	二上町145-1	*	86.**	*	城跡
193	C-135 池 / 墓	吉切字雨ノ原77-3	*	110.**	*	奈良-平安時代墓葬跡
194	C-104 墓 山	高山二丁目12-4	住宅建築	18.**	*	古面跡
195	C-141 墓 薩 沢	薩室字芦瀬町23番地	住宅建築	75.**	立食い溝	魏晉-奈良-平安時代墓葬跡
196	C-103 住 山 上 / 台	山形字上ノ台14-3	*	74.**	試、鍬	竹内郡、越後-平安時代墓葬跡
197	C-301 住 古 城	川内北邊住宅129	*	69.**	立食い溝	城跡
198	C-301 住 古 城	*	*	*	*	*
199	C-108 上 野	高田字上野西44-2	*	124.**	試、鍬	魏晉時代の墓葬跡
200	C-203 住 駕 金 敦	砂押町130-12	*	146.**	立食い溝	京島-平安時代墓葬跡
201	C-501 住 古 城	川内西野町173号	*	46.**	*	城跡
202	C-007 住 駕 金 敦	駕室字御井1号	土手造路、ガス管水	96.**	試、鍬	古面跡
203	C-104 墓 山	高山二丁目3-6	住宅建築	106.**	*	古面跡
204	C-501 住 古 城	川内北邊住宅延宝1640号	*	39.**	立食い溝	城跡
205	C-104 墓 山	高山二丁目11-8	住宅建築	40.**	試、鍬	古面跡
206	C-501 住 古 城	川内北邊住宅107号	*	31.**	立食い溝	城跡
207	C-104 墓 山	高山四丁目11-9 番地先	水道管附設	227.**	*	它
208	C-514 国 分 稲 鈴	二上町177, 180	*	93.**	*	城跡
209	C-183 牛 小 岩	牛尾二丁目4-27	住宅建築	76.**	*	奈良-平安時代墓葬跡
210	C-193 山 田 上 / 台	山田上ノ台14-3	*	87.**	試、鍬	山田郡、越後-平安時代墓葬跡
211	C-168 北 座 敦	六丁字度佐街9	泰岸築堤	94.**	立食い溝	奈良-平安時代墓葬跡
212	C-109 住 米 田	元代字米田山17-23, 21	住宅建築	*	*	魏晉時代墓葬跡
213	C-104 住 日 本	日本字日ノ本2-25	地下排水管、砂押	588.**	*	城跡
214	C-202 住 岩 游	吉次字伊賀前	住宅建築	151.**	*	京島-平安時代墓葬跡
215	C-420 住奥久今尼寺	白幡町300-7	共同住宅建築	151.**	試、鍬、溝	古面跡

登録番号	登録名	所在地	面積(m ²)	地図	地図	道路の性格
216	C-104 郡 山	郡山五丁目145番	歩道新設工事	265.**	試 翻	官街跡
217	C-104 郡 山	郡山五丁目151	住宅建築	58.**	*	*
218	C-102 南 小 村	道見塚二丁目209-8	住宅建築	5.**	立 会 い	房生~古墳時代の墓落跡
219	C-109 上 野 山	鶴取市上野町110-132 他3筆	宅地造成	1,764.**	試 翻	縦文時代墓落跡
220	C-224 郡 春 I	鶴字字橋1-66-1	住宅新築	119.**	立 会 い 清	平安時代墓落跡
221	C-224 郡 春 I	* * 1-72-11	*	115.**		*
222	C-208 道 河 岩	中田町本町36	*	674	試 翻	京良・平安時代墓落跡
223	C-109 人 水 用	荒町子人米山142-35	*	259.**	立 会 い 清	縦文時代墓落跡
224	C-224 郡 寺 I	郡重宝勝寺1-102-6	*	580.**	立 会 い	平安時代墓落跡
225	C-104 郡 山	郡山二丁目7番13号地先	水道管埋設工事	223	試 翻	官街跡
226	C-102 南 小 村	南小字字村家東1-80-34-80-24	住宅建築	87.**		房生~古墳時代墓落跡
227	C-501 仙 古 城	川内造選無番地道路住124号	住宅建築	69.**	立 会 い	城跡跡
228	C-501 仙 古 城	*	*	89.**	*	*
229	C-222 郡 用 町	渡田町二丁目1093-3	*	54.**	*	平安時代墓落跡
230	C-322 芳 宮 男	豊町字東原11-25 他8戸人字120-10	地域集会所建築	101.**	*	獨立社建築物跡
231	C-234 鳴 岩 敷	六丁目1号草壁第22-1	事務所新築	1,813.**	*	縦文~京良・平安時代墓落跡
232	C-102 南 小 村	南小字字村家78-12	住宅建築	82.**	*	房生~古墳時代の墓落跡
233	C-104 郡 山	郡山二丁目141-1	*	91.**	試 翻	官街跡
234	C-141 沢 深 沢	七切丁目浦沢西25-3	*	105.**	立 会 い	縦文~京良・平安時代の墓落跡
235	C-104 南 小 村	道見塚一丁目209-2	*	9.**	*	房生~古墳時代の墓落跡
236	C-401 道 町 麻 木	道町字麻木1121-1	マンション建築	2,330.**	試 翻	官街跡
237	C-135 海 ノ 島	御切字池ノ島80-6	住宅建築	83.**	立 会 い	京良・平安時代墓落跡
238	C-171 一 の 露	一の森14-3	粉水管布設工事	38.**	立 会 い 清	城跡
239	一 下 の 内	宮沢字下の内801-20-2-27-1	住宅建築	215.**	立 会 い	縦文~京良・平安墓落跡
240	C-238 鳴 釜 平	鶴取三丁目11-2-12-2-61-2	宅地造成	8,628.**	*	(隣接)
241	C-507 今 里 城	今里字久保田94-6	住宅建築	87.**	試 翻	城跡跡
242	C-514 四 分 砂 岩	砂ヶ岡17-3	*	85.**	立 会 い	*
243	C-106 上 野	富山市上野西49-10	*	97.**	*	縦文時代の墓落跡
244	C-434 鶴 参 鎮 滝 路	滝町一丁目4番15号	*	84.**	*	墓 路
245	C-419 長 松 鎮 分 金 横	木ノ下三丁目2-2-2	共同住宅建築	328.**	試 翻	桂園町分金跡
246	C-505 北 里 城	郡山字路ノ内	事務所新築	291.**	立 会 い	城跡跡
247	C-104 郡 山	郡山二丁目111-57	住宅新築	288.**	翻	官街跡
248	C-401 道 町 滝 路	滝町76-3	*	15.**	立 会 い	墓 路
249	C-501 仙 古 城	川内造選半宅	住宅新築	69.**	立 会 い	城跡跡
250	C-102 南 小 村	道見塚二丁目313-1	*	75.**	*	房生~古墳時代墓落跡

II. 調査報告

調査要項

遺跡名	大野田古墳群	後河原遺跡	南小泉遺跡
所在地	仙台市大野田字宮脇2-29	仙台市中町字前沖	仙台市遠見塚1-10-1
調査期間	昭和56年6月17日~7月20日	7月5日	8月25日~27日
調査面積	160m ²	75 m ²	125m ²
調査主体	仙台市教育委員会		
調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係		
担当職員	加藤・青沼・金森・長島	加藤・木村・金森	金森



遺跡位置図

大野田古墳群

1. 遺跡の位置と環境

大野田コミュニティーセンターの建設予定地は、仙台駅の南約5km、仙台市大野田字宮脇2番地29に所在する。最近まで近郊農村地帯として静閑なところであったが、宅地化が進み、住宅地として変貌しつつある地域である。

仙台市の東部は、宮城野海岸平野と呼ばれ、名取川、七北田川などの河川が曲流し、仙台湾に注いでいる。大野田周辺は、名取川の形成した沖積面で、郡山低地と呼ばれている。ここは名取川の形成した自然堤防がよく発達し、太白山周辺に源を発する荒川が流路を変えつつ、頻繁に氾濫をくりかえしたところである。

周辺に遺跡が多く、六反田遺跡や山口遺跡では、縄文時代の中期中葉(大木8b式期)以降の生活の跡が認められる。また、高速鉄道建設に伴う宮沢字下ノ内地区の発掘調査でも、縄文時代中期末葉(大木10式期)の竪穴住居跡が検出されている。この付近では、ほぼ4500年くらい前から、人々が住み始めていたのである。また、縄文時代中期中葉の集落跡と考えられる上野遺跡、後期初頭の泉崎浦遺跡などがある。弥生時代については、六反田遺跡で弥生土器の出土例はあるものの、遺構は発見されていない。古墳時代の遺跡としては、埴輪を持つ前方後円墳である裏町古墳、宮沢埴輪窯跡があり、沖積地においても五反田古墳、春日社古墳、鳥居塚古墳、王ノ塙古墳などが知られている。奈良、平安時代のものとしては、六反田遺跡や下ノ内地区の調査で、竪穴住居跡が検出されている。また中世に至っては、平城である宮沢館跡がある。

2. 調査経過

昭和56年6月、仙台市大野田字宮脇2番地29に、大野田コミュニティーセンターの建設が予定された。当建設予定地は、南に春日社古墳、南東に鳥居塚古墳、東に王ノ塙古墳が隣接し、古墳群の形成が指摘されていた地帯である(図1)。よって遺構の存在が充分に予想されたため、試掘調査を実施した。

試掘調査は、建設予定地内の北から5×3mの第1トレンチ、8×3mの第2トレンチ、6×5mの第3トレンチを設定して行った。その結果、第2トレンチと第3トレンチにおいて、溝状の遺構を検出し、それにともなって円筒埴輪片を出土した。これによって、建設予定地内に、古墳時代の遺構の存在が明らかになったため、コミュニティーセンター建設の主管課である市長室相談課と協議し、緊急発掘調査を実施した。

註1 仙台市教育委員会『鳥居塚・春日社古墳』発掘調査現地説明会資料 1978. 1

3. 発見遺構

調査区内で検出された遺構は、溝跡1条（1号溝）、古墳2基（1号墳、2号墳）、ピット2個である。

1号溝 1号溝は、5層上面で検出され、南北方向に延び、2号墳周辺において東に抜けた溝である。上端幅50~60cm、下端幅30~40cm、深さ10~60cmで、断面形はU字形である。1号墳のある北側ほど、溝は浅くなる。堆積土は黒褐色粘土で、一部灰褐色シルト質粘土、あるいはにぶい褐色粘土である。堆積土中からは、内面が黒色処理されたロクロ使用の土師器壺（第5図16）と、埴輪の少破片が出土している。1号墳、2号墳を切っている。

1号墳 1号墳は、墳丘がほとんど削平されていたが、墳丘裾部と周溝部分を調査区北側の5層下面で検出した。裾部はゆるやかな傾斜を示し、周溝部分に至ってほぼ垂直ぎみに落ちる。

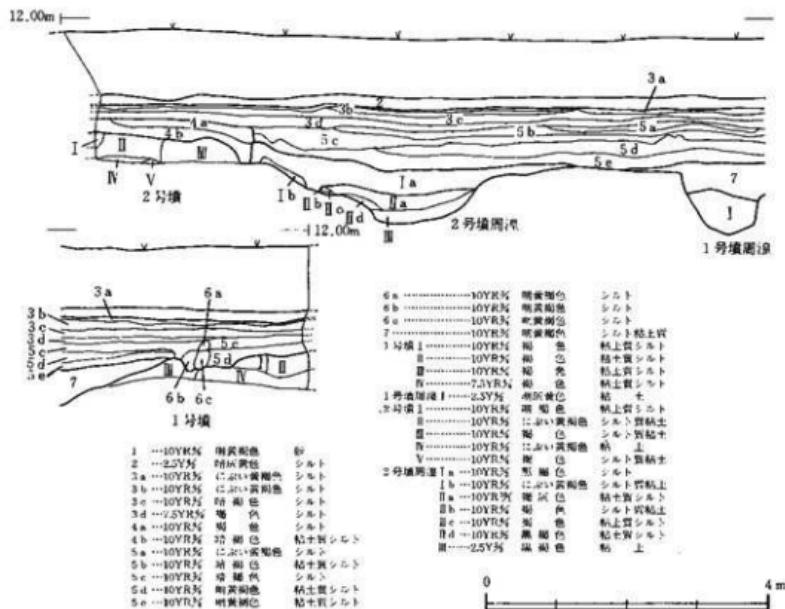


第1図 調査区位置図

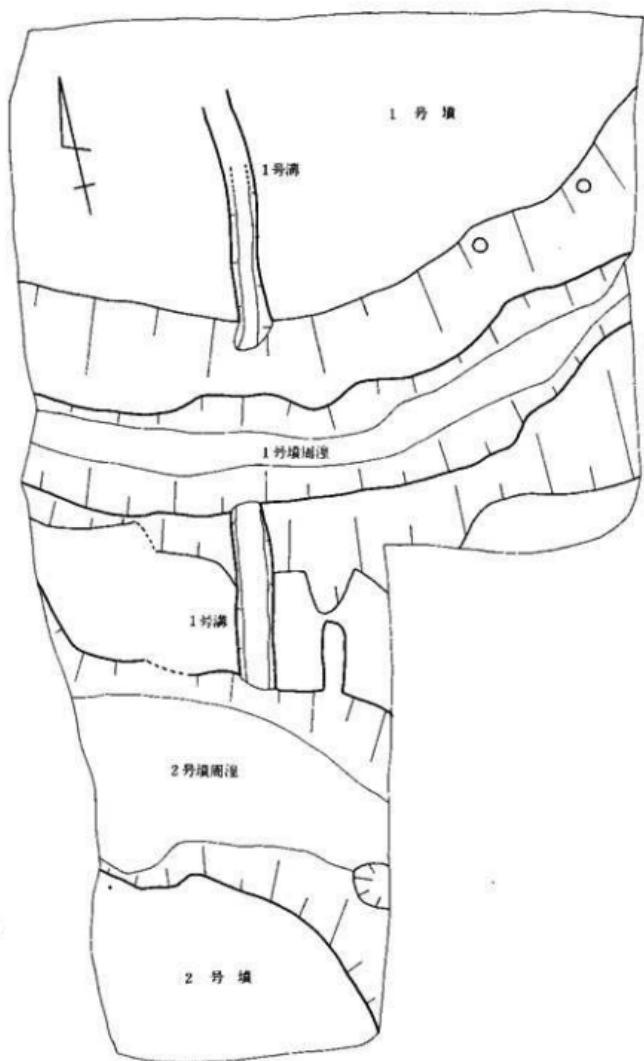
標部から周辺の上端にかけては、部分的に起伏があり、削平を受けてはいるが、径20cm、深さ10cm程の円形ピットを2個検出している。標部付近からは、須恵器陳の体部片3点、口頭部片1点（第5図15）が出土している。

周辺は、東西方向にゆるく弧状に延びる。上端幅1~1.4m、下端幅0.6~0.7m、深さ0.5~1.0mで、断面形はU字形である。堆積土は、暗灰黄色粘土で、その上面から埴輪片がほぼ7つのグループにまとまって出土している。ほとんどが円筒埴輪片であるが、一部朝顔形埴輪の頸部片も含まれる。埴輪片は、1~1.2mの間隔をおいて集中し、破片となっているものと、破片ではあるが一個体分がほぼ原形をとどめながら出土しているものがある。また朝顔形埴輪片は、第4図のようにほぼ5つの円筒埴輪片の間隔を置いて出土している。

2号墳 2号墳は、墳丘は削平され、周辺のみを調査区南側の5層下面で検出した。周辺は、東西方向に延び、上端幅約3~4.5m、下端幅約1mである。断面形は逆台形で、ゆるやかに立ち上る。堆積土は大別して3層で、黒褐色シルト（第Ⅰ層）、褐灰色粘土質シルト（第Ⅱ層）、黒褐色粘土（第Ⅲ層）である。周辺の底面から、朝顔形埴輪片と円筒埴輪片が3つのまとまりをもって出土している。

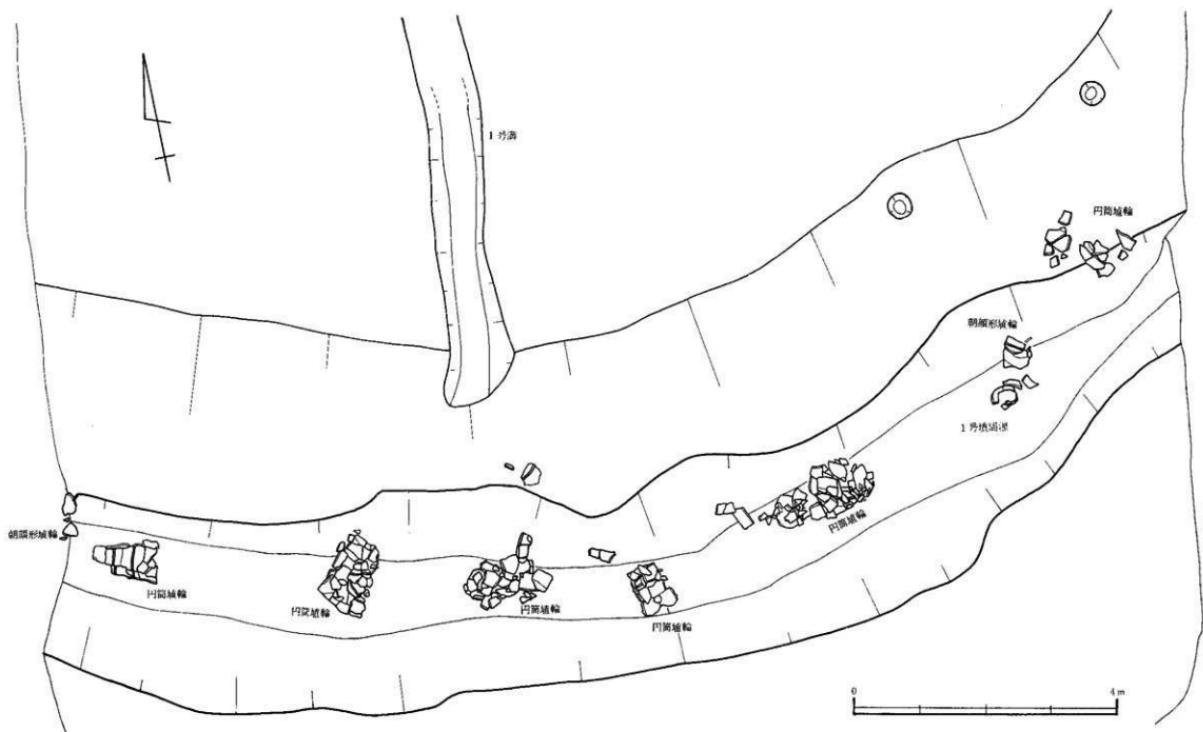


第2図 調査区西壁セクション図



第3図 調査区平面図

0 4 m



第4図 1号墳埴輪出土状況

4. 出土遺物

出土遺物は、総量で平箱10箱分ほどである。須恵器4点、土師器2点、その他は全て埴輪片である。

(1) 墓輪

出土した埴輪の大半は、1号墳、2号墳の周辺からのものである。全てが円筒埴輪片か朝顔形埴輪の口縁部、頸部片であり、形象埴輪片は全く見られなかった。ただし朝顔形埴輪片に関しては、頸部、口縁部は判別できるが、体部や底部については、円筒埴輪のものと区別がつかなかった。

〈円筒埴輪〉

円筒埴輪は、大きさと色調の面から二種に分類できるが、器形の特徴、調整技法等に基本的な差異はない。形状は、底部<体部<口縁部と口径が広がり、体部に2本の凸帯が貼付けられ体部中段上位に円形の透孔が一对穿たれている。器高は49~52cm、底径は16~20cm、口径は26~30cm、透孔の直径は6cmほどである。また底面に棒状の圧痕が残るものもある。色調は、橙色あるいはにぼい橙色である。

外面調整は、縱方向の刷毛目が施されたのち凸帯が貼り付けられ、横ナデが施されている。口縁部にも横ナデが施され、一部には体部にも施されるものがある。凸帯の断面形は、ほぼ台形を呈するが、同一個体でも「コ」字形に近い断面形もあり、一定でない。

内面調整は、体部上段に横方向の刷毛目が施され、その後指ナデがなされている。II縁部には、外面と同様に横ナデが施される。指ナデは、体部上段で縱方向、体部中段で縱方向、一部斜め方向、体部下段で底部に向かった縱方向である。また内面には、体部上段に3本から9本の縱方向に平行する線刻が見られる。

器面に残る刷毛目は、2cmあたり14条から19条とばらつきがあるが、19条のものが多い。また体部中段外面には、焼成後ついたと思われる剝離痕跡のあるものがある。

〈朝顔形埴輪〉

1号墳の周辺から出土した朝顔形埴輪は、頸部から肩部片であり、2号墳の周辺から出土した朝顔形埴輪も、口縁部片、頸部片、頸部から体部片である。よって完形品がなく、器形の詳細な記述是不可能である。しかし、基本的には体部中段上位に透孔を持ち、肩部に至って内湾し、頸部からラッパ状にひらき、頸部とII縁に凸帯をめぐらす器形である。外面調整は、口縁部に縱方向の刷毛目があり、肩部に横方向と斜め方向の刷毛目がある。また突帯がはりつけられたのちには、横ナデが施される。内面調整は、指ナデの他にヘラナデが施されるものがある。器面に残る刷毛目は、2cmあたり14条と18条であるが、14条のものが多い。また、頸部と肩部に木の塗られた痕跡のあるものもある。

(2) 須恵器

須恵器は、1号墳の墳丘裾部付近から腰の体部片3点と口頸部1点（第5図15）が出土している。各破片とも接合しないが、体部片に関しては胎土・色調等から同一個体と考えられる。

体部片の1点には、径1.1cmほどの円孔を有するものがある。内外面ともロクロ調整が施され、胎土は緻密で、焼成も良好である。色調は、外面が灰色、一部灰白色、内面は灰白色である。

口頸部片（第5図15）は、頸部からゆるく外傾し、口端に至って外反する。外面の中ほどに縁を有し、その上部に幅1cmほどの6条の櫛描き波状文が入る。器厚は、4～5mmで、内外面ともロクロ調整が見られ。胎土は緻密で、焼成も良好である。色調は、内外面とも暗青灰色である。

(3) 土師器

土師器は、1号溝と2号墳周辺堆積土（第1層）から出土している。1号溝出土の土師器（第5図16）はロクロ使用の环で、体部下端に手持ちヘラケズリ、内面は黒色処理されている。底部切り離し技法については不明である。2号墳の周辺の堆積土から出土した土師器は底部切り離し技法については不明である。2号墳の周辺の堆積土から出土した土師器は、ロクロ使用の环と思われ、底部と体部下端は回転ヘラケズリ、内面はロクロ調整が見られる。小破片のため詳細は不明である。

5.まとめ

調査区内で検出した古墳は、1号墳、2号墳とも墳丘部がほとんど削平されており、形状や規模を正確に知ることはできない。しかし、1号墳に関しては、円墳とすれば周辺最深部の復元直徑で、22mほどである。2号墳に関しては、調査面積が狭いため不明である。

1号墳から出土した埴輪は、円筒埴輪、朝顔形埴輪とも、仙台市裏町古墳（註1）、宮沢窯跡（註2）出土のものと、器形、調整技法等から見て類似するものである。また、墳丘裾部付近から出土した須恵器腰の口頸部片は、口縁部から頸部までが短かく、最大径が体部に求められそうである。器形の特徴から見て、仙台市の大蓮寺窯跡（註3）、陶邑のI型式2～3段階（註4）のものに類似する。

次に埴輪の出土状況であるが、1号墳では、周辺がほとんど埋まった段階で、ほぼ同時期に埴輪が入り込み、破片ではあるが個体の原形をとどめているものもある。また朝顔形埴輪片は、5つの円筒埴輪片の間隔をわいて出土しており、ほぼ5～6本の円筒埴輪の間隔をわいて立て並べられていたと考えられる。2号墳では、周辺底面からまとめて出土し、1号墳の出土状況とは、異なった様相を呈している。なお、器形から見ても、朝顔形埴輪片が多い。

古墳の築造年代は、両古墳とも調査区内で主体部を検出できなかったこともあり、判断しが

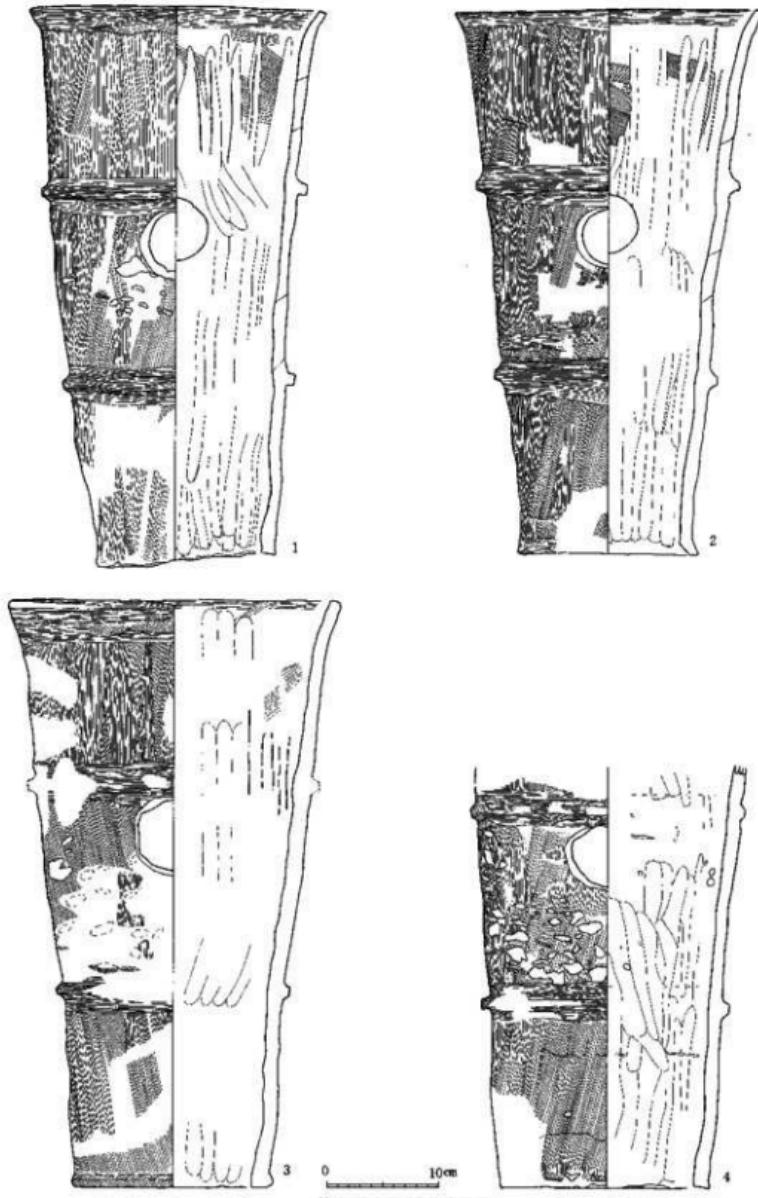
たいが、1号墳から出土した埴輪が、5世紀末から6世紀初頭に造られたと考えられる裏町古墳(註6)と類似する。また、出土した須恵器鱗片の年代が、5世紀後半から6世紀初頭(註6)と考えられる。これらのことから、1号墳の築造年代は、5世紀後半から6世紀の初頭と推定され、2号墳も、出土した埴輪に差異を見い出せないことから、さほど時期をへだてたものではないであろう。

両古墳の埋まり始めた時期であるが、1号墳の周辺に堆積土からは、埴輪以外の遺物を出土せず、堆積土上面に埴輪が集中する。このことから、あまり時間を経ずに埋まつたものと考えられる。2号墳周辺の堆積土Ⅰ～Ⅲ層からは、埴輪以外の遺物を出土せず、Ⅰ層からはロクロ使用の土師器を出土している。よって、平安時代まで長い時間を経て埋まつたものと考えられる。また、5層上面で検出できる1号溝からも、ロクロ使用の土師器が出土しており、それ以降の遺物を全く含まないことから、平安時代頃には両古墳とも周辺は埋まり、微地形としての高まりはあったものの、墳丘と言えるような高まりは失われていたと考えられる。

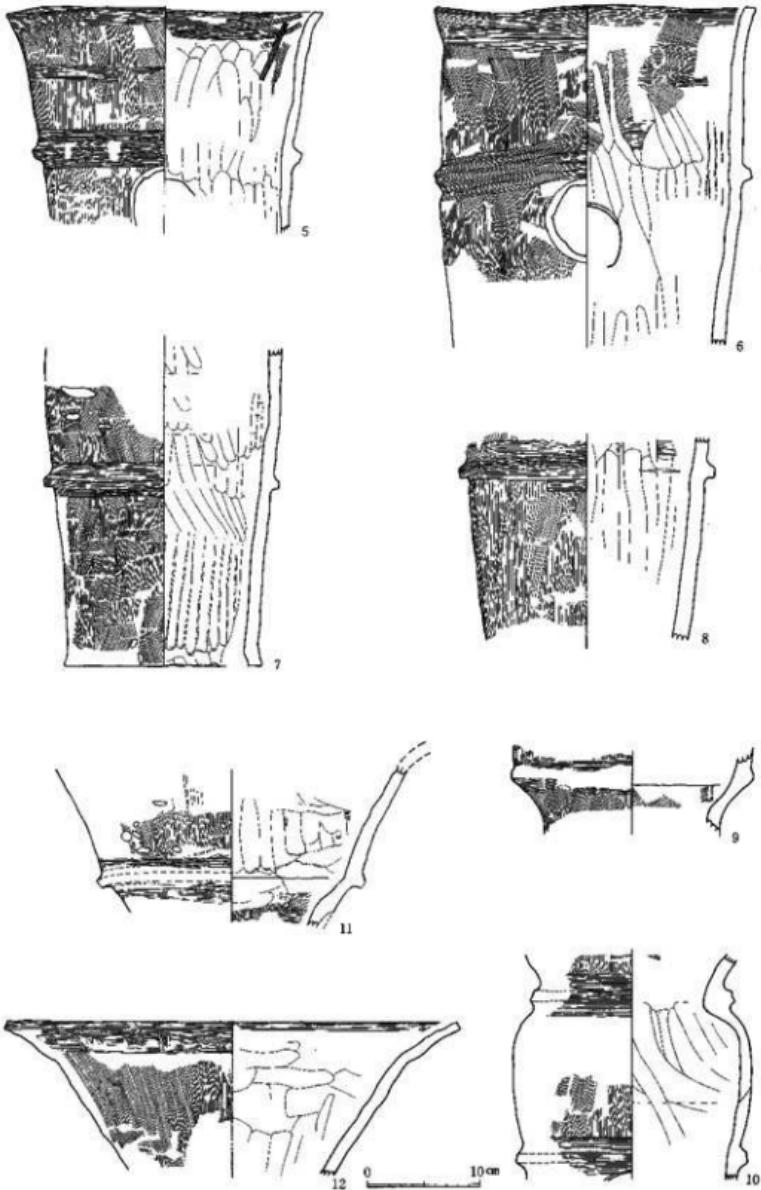
大野田周辺は、今回検出した1号墳の他にも、王ノ塚古墳、春日社古墳、鳥居塚古墳(註7)、丘反田古墳(註8)などがあり、宿在家、皿屋敷付近からも埴輪片が採集され、古墳のあった可能性が指摘されている(註9)。また未知報告であるが、春日社古墳、鳥居塚古塚からも、円筒埴輪や一部形象埴輪片も出土している(註10)。これらのことから、名取川の北岸から荒川の流域一帯は、埴輪をもつた古墳群が形成されていたと考えられる。(長島栄一)

註

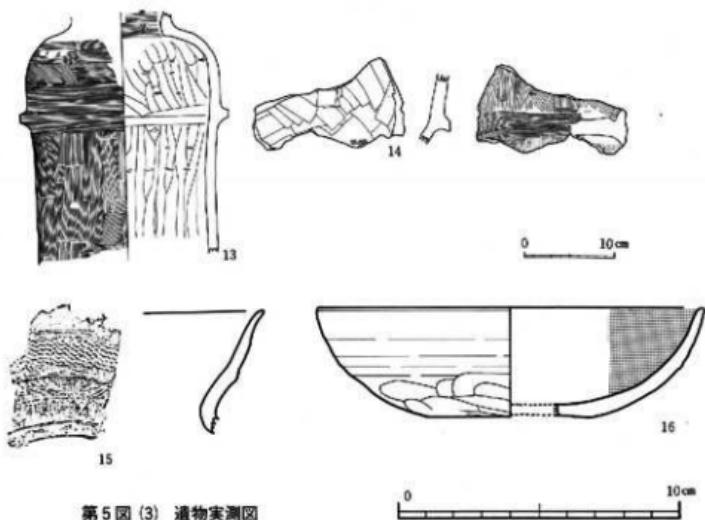
- 註1 仙台市教育委員会、仙台市富沢「裏町古墳発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第7集
1975. 3
- 註2 古窯跡研究報告第3冊「富沢窯跡」 1975. 9
- 註3 古窯跡研究会研究報告第4冊「陸奥国古窯跡群Ⅱ」 1976. 5
- 註4 中村清「和泉陶邑窯の研究」柏書房1981. 11. 大阪府教育委員会・財團法人大阪文化財センター「陶色」Ⅰ～Ⅲ 1976. 1977. 1 1978.
- 註5 註1と同
- 註6 渡辺泰伸「東北古墳時代須恵器の様相と編年」古窯跡研究会研究報告第6冊「陸奥国古窯跡群Ⅵ」 1981. 3. 他註4と同
- 註7 仙台市教育委員会「鳥居塚・春日社古墳」発掘調査現地説明会資料、1978. 1
- 註8 仙台市教育委員会、日本電信電話公社東北電気通信局「六反田遺跡」仙台市文化財調査報告書第34集 1981. 12
- 註9 宮城教育大学考古学研究会「名取川水系遺跡分布調査」「宮教考古」5. 1973 渡辺伸行
「埴輪を通してみた東北地方古墳時代社会の研究」東北大大学院文学研究科修士論文
- 註10 註7と同



第5図(1) 遺物実測図



第5図(2) 遺物実測図



第5図(3) 遺物実測図

埴輪計測表 (遺物実測図番号に対応)

番号	名 称	出土位置	器高	口径	底径	直 径		内 径		通 孔		網目	色 調	備 考	
						口端	中段	下端	中央	半円	圓形	底端	網目		
1	円筒埴輪	1号埴輪窓	49.2	25.2	15.0	0.7	0.9	1.1	0.8	0.7	合形	6.2	6.7	19	S Y R % 横
2	円筒埴輪	1号埴輪窓	48.5	27.5	16.0	0.7	1.1	1.3	0.7	0.8	合形	6.0 (5.4)	14	S Y R % 横	
3	円筒埴輪	1号埴輪窓	32.2	29.6	19.8	0.8	1.5	1.2	0.8	0.8	合形	4.8	7.0	19	S Y R % 横 △△△△
4	円筒埴輪	1号埴輪窓	38.8	—	(15.9)	—	—	1.1	0.7	0.8	合形	4.8	7.0	19	2.5 Y R % 横
5	円筒埴輪	埴輪窓空窓	30.2	28.6	—	0.6	0.9	—	0.7	0.7	合形	5.4	6.0	18	S Y R % 横
6	円筒埴輪	1号埴輪窓	20	28.5	—	1.1	1.2	—	0.8	0.8	合形	6.3	6.3	19	S Y R % 横
7	円筒埴輪	1号埴輪窓	28.4	—	17.4	—	1.1	1.2	0.7	0.7	合形	—	—	16	7.5 Y R % (△△△△) 横
8	円筒埴輪	1号埴輪窓	19.5	—	—	—	—	1.4	0.8	0.8	合形	—	—	14	7.5 Y R % (△△△△) 横
9	軽細形埴輪	1号埴輪窓	—	—	—	—	1.0	1.5	—	—	—	—	—	14	S Y R % 横
10	軽細形埴輪	1号埴輪窓	25.0	—	—	—	1.1	—	0.8	0.8	合形	—	—	14	S Y R % (△△△△) 横
11	軽細形埴輪	2号埴輪窓	13.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	14	10 Y R % 穴 白
12	軽細形埴輪	2号埴輪窓	13.5	—	(40)	—	0.6	—	—	—	—	—	—	14	7.5 Y R % (△△△△) 横
13	軽細形埴輪	1号埴輪窓	—	—	—	—	1.0	—	1.1	1.0	M P X	—	—	18	2.5 Y R % 横
14	軽細形埴輪	2号埴輪窓	28	—	—	—	1.0	—	0.8	0.8	合形	—	—	14	S Y R % 横
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ、4本の縫割入り
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷毛目のも口縫隙ナデ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷ナダ、横ナダ
															表面：刷毛目のも一部擦ナデ 裏面：刷ナダ、横ナダ



圖版1 全 景



圖版2 1号 墓



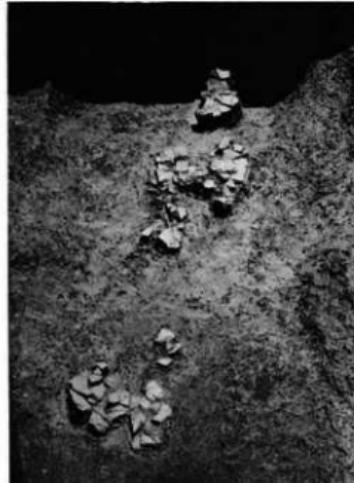
圖版3 2号 墓



图版 4 1号填墙出土状况



图版 5 1号填墙出土状况



图版 6 2号填墙出土状况

图片 7 1号填墙输出土状况



图版 8 1号填墙输出土状况



图版 9 出土遗物

1号填出土円筒埴輪(第5圖—2)



1号填出土円筒埴輪(第5圖—1)





1号墳出土円筒埴輪
(第5図-4)



1号墳出土朝顔形埴輪
(第5図-10)



1号墳出土朝顔形埴輪
(第5図-13)



1号墳出土円筒埴輪(第5図-6)



1号墳出土円筒埴輪線刻(第5図-6)



1号墳出土円筒埴輪(第5図-5)



1号墳出土埴輪(第5図-15)

後河原遺跡

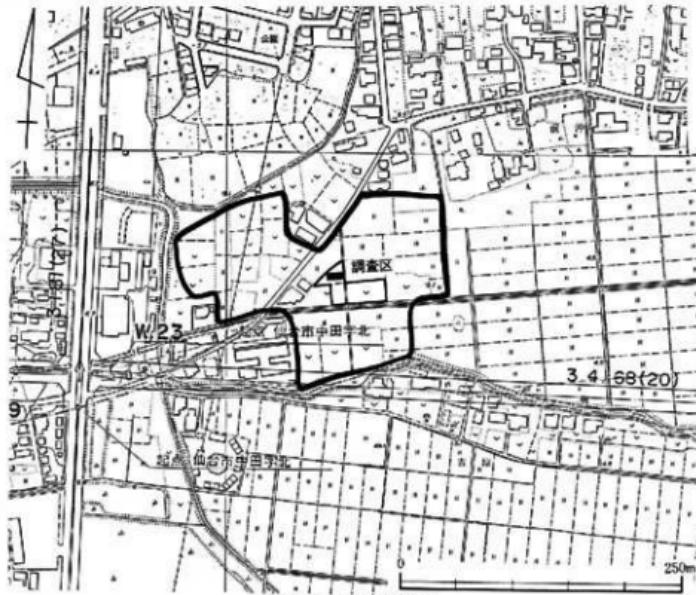
1. 遺跡の位置と環境

遺跡は仙台市の南東部の沖積地、名取市との境界に位置する。南仙台駅から南東へ1.5km、国道4号線仙台バイパスから東へ500mの地点である。遺跡の西方5kmには奥羽山脈に連なる、標高200m程の高館丘陵が延びており、名取平野に東面している。北方1.5kmには二口峠を源とする名取川が東流、広瀬川と合流して太平洋に注いでいる。遺跡はこの名取川の形成した、自然堤防上に位置している。

周辺の遺跡としては、西方に縄文時代前期の大集落跡である今熊野遺跡、縄文時代後期から晩期を中心とした金剛寺貝塚、古墳時代の集落跡である清水・安久東・栗遺跡が分布しており、古くから自然条件に恵まれた地であることが理解できる。

2. 調査経過

申請地北側に5×15mのトレンチを設定し、重機で擾乱層の排土を行った。調査区の基本層位は、I・II層耕作土、III層黒褐色粘土質シルト、IV層黄褐色シルト質粘土（地山）に分けられる。排土中、北壁II層下部で土師器甕片が出土したため、人力でトレンチを2×4m拡張した結果、拡張部II層下部で土師器甕片、須恵器環等が出土した。次に、III層上面で精査、遺構



第1図 調査区位置図

確認を行い、南西コーナーで土壤状のプランを検出した。また、拡張部で焼土を含んだⅢ層が南北2m、南西1m程の不定形をもって広がっているのを検出、2cm程掘り下げたところ、圓くひきしまった焼土と土師器変片が出土した。

次に、トレンチ内Ⅲ層を排出し、Ⅳ層上面で精査を行い、ピット2個を検出した。

3. 発見遺構

土壤 トレンチ南西コーナーⅢ層上面で検出。西壁で1m、南壁で1.3m、深さ50cmを計る。堆積土はⅠ・Ⅱ層擾乱土であり、遺物を包含しない。回りの状況から拡張できなかったため性格等は不明であり、溝跡の可能性もあるが、いずれにせよ新しい時期の遺構と考えられる。

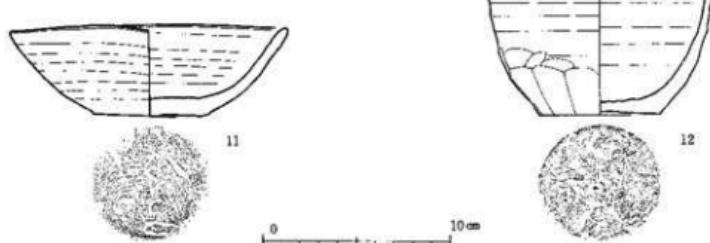
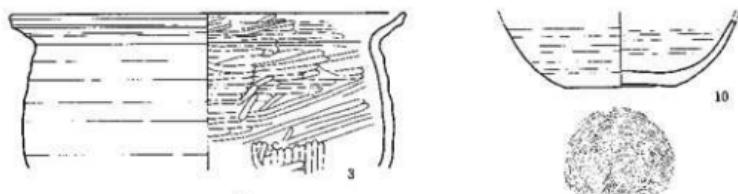
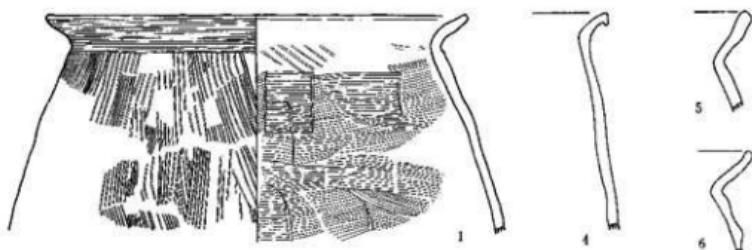
焼土 トレンチ拡張部Ⅲ層上面で検出。プランは検出面で25×15cm、深さ5cmを計り、2~3cm程の圓い焼土粒を多く含み、遺物は出土しない。小さな焼土粒の広がりが40×30cm程の範囲で見られる。

ピット Ⅳ層上面、焼土遺構の南西約3m、南東約5mで1個ずつ検出。プランは検出面で30×30cm、40×40cmで深さはいずれも5cm程である。堆積土はⅢ層で遺物は出土しない。

4. 出土遺物

Ⅱ層出土遺物 土師器変口縁部が9点、須恵器环2点が焼土遺構上部のⅡ層下部より出土している。その他土師器片、須恵器が少量出土しているが、復元可能な個体は皆無である。

(1) 土師器（第2図1~9） 縫の口縁部が9個体あるが、欠損部分が多く器形の全体がわかるものはない。1は口縁部が「く」字に外反して端部に丸味を持つ。口径が推定で22.5cmを計る。器面調整は外面の口縁にナデ、体部上半に縦位のハケメが施され、内面は体部上半が横位のハケメにより調整される。2は、ロクロ使用、体部からわずかに内弯気味に立ち上がり口縁部に至る。口径は推定で25.7cmを計る。3は、体部上端で丸味を持って立ち上がり、口縁部が「く」字状に外反、端部に沈線状の凹みが回っている。口径は推定で21.2cmを計る。器面調整は外面がロクロナデ、内面が口縁部・体部上半にヘラミガキがなされている。4は、体部上半が内傾し、口縁部は小さく外反、端部は下端が幾分下にのびている。器面調整は外面の口縁にナデ、体部上半に縦位のハケメが施され、内面は口縁部がナデ、体部上半が横位のハケメにより調整される。5~9はロクロ使用である。5は、口縁部下半で器厚が薄く、端部にいくにつれて器厚を増す。外面にロクロ調整、内面にミガキの調整がなされている。6は、内傾する体部から口縁部が「く」の字状に外反し、端部がわずかに直立して受口状を呈す。外面にロクロ調整の調整が観察されるが、内面は不明である。7は、直立する体部から口縁部が外反し、口端部に浅い沈線状の凹みが回っている。外面にロクロ調整、内面にミガキの調整が施されている。8は、口縁部が外反し、端部で下端が下にのびている。外面にロクロ調整、内面は口縁にミガキの調整が施されている。9は、体部が内傾しながら立ち上がり、口縁部はわずかに外方に引き



第2図 出土遺物実測図

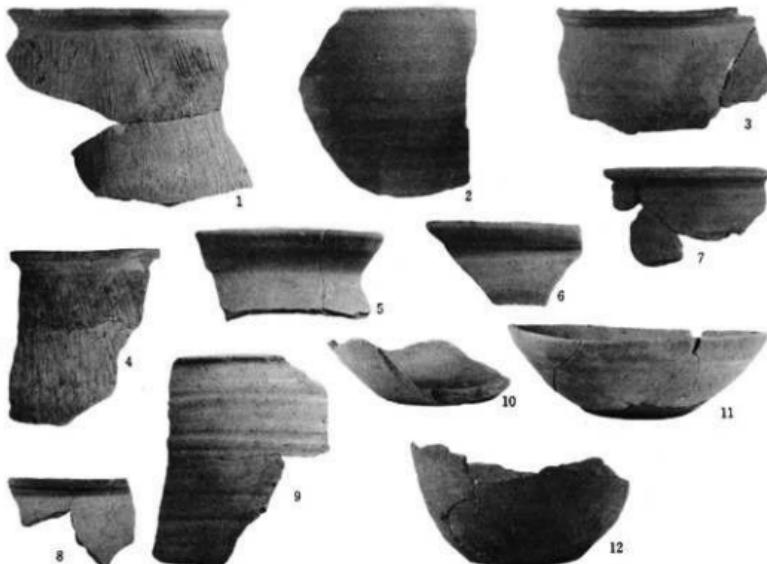
出されている。

(2) 須恵器 (第2図10~11) 壊が2点ある。10は口縁部が欠損し器高は不明だが、回転糸切り無調整で底径6cmを計る。11は、底部から口縁部にかけてわずかに丸味を持ち、内湾気味に立ち上がり、回転糸切り無調整で底径6.2cm、口縁径14.8cm、器高4.9cmを計りややゆがみがある。

Ⅲ層出土遺物 底部から体部下端の土師器隻片1点のみである。底径は6.4cmを計るがその他詳細は不明である。クロ成形により体部下端に横位のヘラケズリが、底部に手持ちヘラケズリが施されている(第2図12)。

5. まとめ

- ① 焼土、ピットの検出、土器の出土状況などから見て、Ⅱ層下部からⅢ層上部にかけて、豊穴住居の存在が考えられるが、耕作等の擾乱が著しく、住居跡の壁、床面、カマド等が削平されたものと見られる。焼土は、豊穴住居跡のカマド燃焼部の基底面であり、2個のピットはそれに伴う柱穴の痕跡と理解したい。
- ② 後河原遺跡は、出土遺物から見て平安時代の集落跡と考えられるが、かなり擾乱を受けていることから、各造構および集落全体を理解するに至らなかった。今後の調査結果を待つてなお検討を要する。(加藤正範)



出土遺物

南小泉遺跡

1. 遺跡の位置と環境

南小泉遺跡は、仙台駅の東南約4km、霞ノ目飛行場から仙台バイパスをはさんで西に大きく広がる遺跡である。主に弥生時代から平安時代にかけて、東北でも有数の大集落跡で、この地域は「霞ノ目低地」と呼ばれ、広瀬川の現世につづく氾濫原である。遺跡の中心には東北で第3位の規模の前方後円墳である遠見塚古墳、東には仙台市東郊条里跡、西には横穴式石室をもつ法領塚古墳などがある。また、北方約1kmには陸奥國分寺・同尼寺が位置し、歴史的環境に恵まれた地域であるが、近年來、宅地化が著しく進行している。

2. 調査経過

仙台市南小泉四丁目10-2 苗原多利藏氏より、遠見塚一丁目10-1他において個人住宅建築用地の造成工事に伴い、昭和56年6月発掘届が提出されたので、敷地内の遺構確認調査を実施した。敷地の南東部に8.5×14.5mの南北方向のトレンチを設定し、土砂を排除したところ、標高約11.2mの現地表面から、深さ20~50cmの耕作土(I層)の下の褐色粘土質シルト層(II層)上面で、土壙3基、溝跡2条、ピット4個を発見した。また、調査区南東隅では、I層下面から多量の土師器破片を集中して出土している。さらに、調査区北壁にそって掘り下げたところ、調査区北東隅で竪穴遺構1基を発見した。

今回の調査は、事前協議の段階で、遺構面を損壊しないような盛土措置をとった後に住宅の建築が行われることが確認されていたために、遺構の堆積土を掘りあげることはせず、遺構の確認調査にとどめた。



第1図 調査区位置図

3. 発見遺構・出土遺物

1号竪穴遺構 調査区北東隅で、調査区北壁にそって褐色粘土質シルト層(II層)を約20cm掘り下げたところ発見した。一部を検出しだけで、全形・規模とともに不明であるが、深さ10~15cm程で、堆積土は暗褐色粘土質シルトで、多量の炭化物を含んでいる。

(出土遺物) 土師器高環・环・甕を出土しており、図化できたものは6点である。

高环は一體に接合・復元できたものではなく、环部または脚部の破片である。

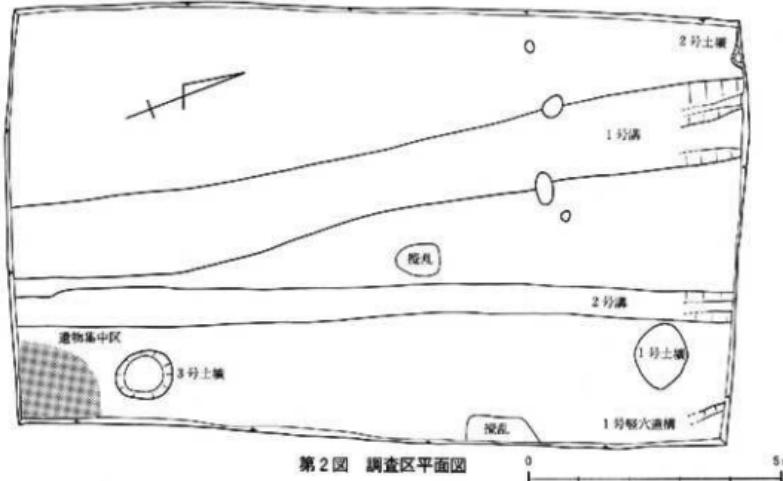
第3図1は、环部の $\frac{1}{2}$ 破片で、体部外面に2本の稜線がめぐり、底部から下位の稜線にかけて強く外傾し、体部は上位の稜線を介して二段に外反する。上位の稜線の内側には段を有する。器面は、磨耗が著しいが、内外面の一部にヘラミガキが観察される。

第3図2は、脚部の柱状部分で、裾部は欠損しているが、环底部がわずかに残存している。筒状の柱状部は直立に近く、下端がわずかに太い。外面は縦位のヘラケズリ、内面はヘラケズリ、ナデが施されている。

第3図3は、脚部の $\frac{1}{2}$ 破片である。外面はなだらかに広がり、先端はわずかに反り上がる。柱状部分との境は明瞭ではないが、残存部内面上端が直立ぎみに立ち上がる。器面調整は、外側が縦位のヘラミガキ、内面端部は横ナデが施され、その後、上半に横位のヘラミガキ、下半に横位のヘラナデが施されている。

环は図化できたものが2点ある。

第3図4は、底部から体部下間にかけての破片で、底面が丸く凹み、体部は内湾ぎみに緩やかに立ち上がる。体部外面にヘラケズリが施されているが、内面の調整は磨耗が著しく不明で



第2図 調査区平面図

ある。器形は壺となる可能性がある。

第3図5は、底部から口縁部にかけての $\frac{1}{2}$ 破片で、丸底の底部から緩やかに立ち上がり、口縁部は直立ぎみに立ち上がる。器面が磨耗していて明瞭ではないが、外面は体部にヘラケズリ、口縁部に横ナデが、内面は体部に放射状のヘラミガキ、口縁部に横ナデが施されている。

甕は小破片が多く、1点のみ図化できた。

第3図6は、口頸部の $\frac{1}{2}$ 破片で、頸部から外反して開く。外面は口縁部に横ナデが、その後、頸部には体部に続く継位のナデが、内面は継位のヘラナデが施されている。

1号土壙 調査区北東部、II層上面で発見した。検出面での平面形は楕円形で、大きさは120×110cmである。堆積土を掘りあげていないため、詳細は不明である。

2号土壙 調査区北西隅、II層上面で発見した。一部を検出しただけで、全形・規模とともに不明であるが、深さは30~40cm程で、堆積土は暗褐色シルトで、炭化物を多く含んでいる。

(出土遺物) 丸瓦、土師器壺・甕を出土している。

第3図7は、有段の丸瓦の破片である。凸面は繩叩きの後、全面をスリ消している。凹面に布目痕があり、1cmあたり6~8本の糸目を数え、布の縫ぎ目痕がみられる。

第3図8は、口径13.7cm、底径6.0cm、器高4.2cmの完形の土師器壺で、ロクロ成形により、底部切離しは回転糸切り技法である。体部下端に右回りの手持ちヘラケズリが施されている。内面は、体部に斜位のヘラミガキの後、底部から体部にかけて放射状のヘラミガキが施され、黒色処理されている。

第3図9は、土師器の長胴甕の口縁部から体部下半にかけての $\frac{1}{2}$ 破片である。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部がやや直立ぎみに立ち上がり、受口状を呈す。内外面にロクロ調整が、体部下半外面にヘラケズリが施されている。

第3図10は、土師器の長胴甕の口縁部から体部にかけての $\frac{1}{2}$ 破片である。口縁部は「く」字状に外反し、端部外側に沈線がめぐる。内外面ともロクロ調整が施されている。

3号土壙 調査区南東部、I層上面で発見した。検出面での平面形はほぼ円形で、大きさは110×100cm、深さは5~10cm程である。堆積土は褐色粘土質シルトで、焼土粒、炭化物を含んでいる。

(出土遺物) 土師器壺(第4図1)が完形のまま倒立した形で出土した。底部は丸底で、体部は内弯ぎみに立ち上がる算盤玉形を呈し、頭部で屈曲し、外反する口縁部をもつ。最大径の位置は体部中央よりわずかに上にあり、最大径は器高よりも大きい。体部上半に巻き上げ痕がみられ、底部内面中央がわずかに凹む。外面は、体部上半に斜位のハケメ、最大径部分に横位のハケメ、体部下半にヘラケズリが施されているが、口縁部は磨耗しており不明である。内面は、体部にハケメの後、底部から体部にかけてナデが、口縁部に横位のハケメの後、ナデが施され

ている。内外両面には朱が塗られ、体部下半内面にはスス状炭化物も付着している。底部内面には、粒長6.9mm、粒幅3.7mmのモミと思われる圧痕（図版4）が認められる。

1号溝 調査区を南北方向に延びる溝で、Ⅱ層上面で発見した。検出面での上端幅は160～120cmである。調査区北壁の観察によれば、深さ60cm、底幅25cm程で、西壁は直線的な立ち上がりを呈すが、東壁は底面から15cm程立ち上がった後、幅80～50cm程平坦面をなしている。堆積土は褐色系シルト質粘土で、鐵化鉄を含んでいる。

2号溝 調査区を南北方向に延びる溝で、Ⅱ層上面で発見した。検出面での上端幅は80～55cmである。調査区北壁の観察によれば、深さ15cm、底幅20cm程で、断面形は幅半なU字形を呈す。堆積土は黒褐色シルトである。

ピット 調査区北西部、1号溝の周辺、Ⅱ層上面で、大きさ60～10cmの円形ないし楕円形のピットを4個発見したが、完掘していないために詳細は不明である。

遺物集中区 調査区南東隅、耕作土（1層）下面から多量の土師器破片を集中して出土したが、Ⅱ層上面で遺構を発見することはできなかった。

（出土遺物） 土師器壺・高杯・盞・坪の破片を出土しているが、図化できたものは次の4点である。

第4図2は、壺で、ほぼ完全な形に接合・復元することができた。体部は緩やかに立ち上がり、口縁部で外側に開く。平底の底部中央に径2cm前後の孔を1個有し、底部外面にヘラケズリを施した後、ヘラで焼成前に穿孔している。外面は、口縁部横ナデの後、体部上半に縦位のハケメ、さらに体部下半にヘラケズリが施されている。内面は、体部下半に横位のハケメの後、体部上半から口縁部にかけて横位のハケメとヘラナデが施されている。

第4図3は、高杯の壺部の $\frac{1}{4}$ 破片である。体部外面に段がつき、口縁部にかけて外反する。外面は、横ナデの後、縦位のヘラミガキが施されている。内面は、段の内側および口縁部に横ナデが施され、その後、縦位のヘラミガキが施されている。

第4図4は、盞の口縁部の $\frac{1}{4}$ 破片で、頭部から「く」字状に外反する。内外面とも横位のヘラナデが施されている。

第4図5は、盞の口縁部から体部にかけての破片である。体部は球形に近く、頭部ですぼまり、口縁部は外傾する。器面の磨耗が著しいが、外面は、体部から頭部にかけて縦位のヘラナデが、口縁部に横位のヘラナデが施され、内面は横位のヘラナデが施されている。巻き上げ痕がみられる。

4. まとめ

今回の調査は、遺構確認にとどまり、全ての遺構の堆積土を掘りあげなかつたために、調査区内の遺構の性格、関連について充分に検討を加えることはできなかつた。

出土遺物の観察から、1号竪穴遺構は、環体部外面に2本の稜帯をもつ高环（第3図1）が塙釜式期に入る可能性もあるが（註1）、南小泉式期の特長を有する上器が多く、また、3号小塙からも塙釜式期に近い特長をもつ、体部が算盤玉形の内外面朱塗りの壺（第4図1）を出土しており、古墳時代前期から中期にかけての遺構と考えられる。

遺物集中区は、出土した上器の殆んどが南小泉式期のものと考えられるが、壺（第4図2）は、器形・器面調整が葬間式期のものと類似しており（註2）、まとまって出土した土器の中でも、古墳時代中期と後期とに分けられる。

2号土塙は、出土した土師器の製作にロクロを使用しており、平安時代の遺構と考えられる。

1号土塙、1号・2号溝、ピットに関しては、完掘していないために時期は不明である。

以上のことから、今回の調査区内では、古墳時代前期から後期にかけての遺構と、平安時代の遺構が発見され、調査区の周辺にも遺構の分布が広がることが推定できる。（金森安孝）

註

註1 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14輯 東北史学会 昭和32年

註2 東北学院大学考古学研究部 「栗遺跡発掘調査報告」『温故』第11号 昭和54年

宮城県教育委員会 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』V 昭和56年

参考文献

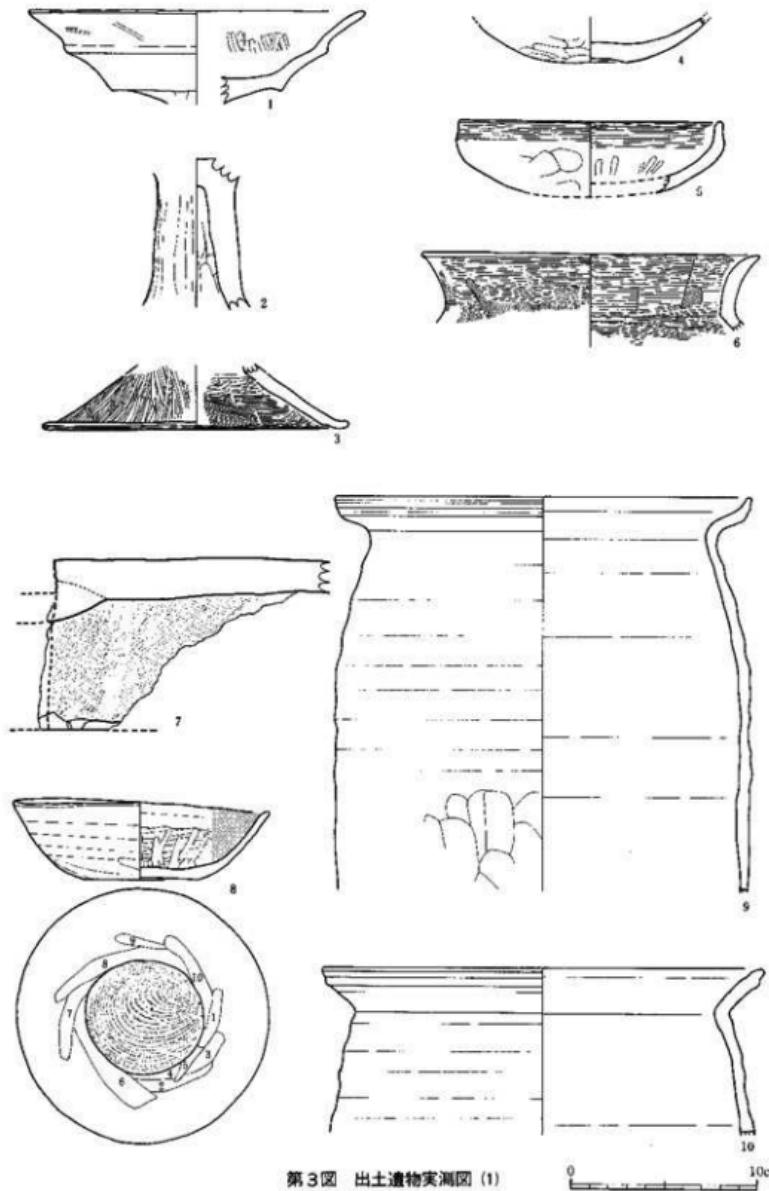
宮城県教育委員会 「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』I 昭和49年

仙台市教育委員会 「南小泉遺跡一範囲確認調査報告書」 昭和52年

宮城県教育委員会 「台ノ山遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』II 昭和55年

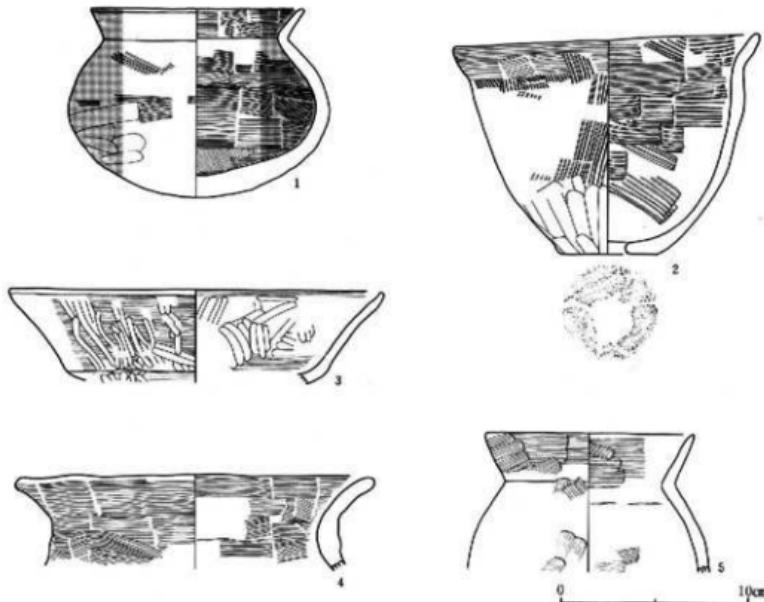
宮城県教育委員会 「留沼遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書』III 昭和55年

仙台市教育委員会 「南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告」 昭和57年



第3図 出土遺物実測図(1)

0 10cm



No.	目 標	出土遺構	法 面 (cm)	残 存	器 面 形 態		考 査 記		
					外 面	内 面			
第301	上部器底环	1号窓穴造縫	(17.0)		环部厚 ハラミガキ	ハラミガキ	体部外側に2本の縫織が的でる		
2	土師器底环	1号窓穴造縫			周縁部厚 縫織ハラケズリ	ハラケズリ。ナ ダ			
3	土師器底环	1号窓穴造縫		(16.4)	周縁部厚 縫織ハラミガキ	横ナダ(縫織) 縫織ハラミガキ			
4	土師器底环	1号窓穴造縫		(3.3)	底部一 体部下半 ハラケズリ(体部)		底面がやや凹む。底 から?		
5	土師器底环	1号窓穴造縫	(13.8)	(4.0) 先端 体部下半 口縁部厚	横ナダ(口縁部) 縫織ハラケズリ(口縁部)	縫織ハラミガキ 横ナダ(口縁部)			
6	土師器縫	1号窓穴造縫	(18.9)		口縁部厚 横ナダ(口縁部)、縫 織ナダ(縫部)、体 部	横ナダ(口縁部)			
7	丸 瓦	2号 土 瓦			凸面: 明きの後、 全面スルシ	凹面: 布目(目 数6~8本/cm)	5		
8	土師器縫	2号 土 瓦	13.7	4.2 6.0 完形	ハラケズリ(体部下 半)	凹様: 截解模 ハラケズリ、黒色 化	ロフワ底面、瓶型切 断しは法一輪転切 断		
9	土師器縫	2号 土 瓦	(22.2)(22.2)		口縁部一 体部下半厚 スリ(体部下)	ロクロナダ、ハラケ ズリ(体部下)	ロクロナダ	7	
10	土師器縫	2号 土 瓦	(23.4)(22.6)		口縁部一 体部下半厚	ロクロナダ	縫部に沈縫	8	
第430	土師器縫	3号 土 瓦	11.2 13.9 16.1 丸底	完形	斜2ハラメ(体部上 半厚)、横2ハラメ(体 部下)、縫織ハラケズ リ(縫部下)	ハラメ、ナダ	青色表面あり。体部 外側に2本の縫織 が的でる。底面内側 もその状況	3 4	
	土師器縫	遺物集中区	16.2	11.4	5.0 横2完形	ハラケズリ(底 部)、縫織ハラケズ リ(縫部下)	縫織ハラメ ヘラナダ(口縁 部一體部下)	縫部中央に径約2cm の穿孔	9
	土師器縫	遺物集中区	(20.0)		口縁部厚	横ナダ、縫織ハ ラミガキ	横ナダ、縫織ハ ラミガキ		
	土師器縫	遺物集中区	(18.6)		口縁部厚	横往ハラナダ	横往ハラナダ		
	土師器縫	遺物集中区	11.0 (12.8)		口縁部一 体部	横往ハラナダ(体 部) (縫部)、横往ハラナ ダ(口縁部)	横往ハラナダ		

第4図 出土遺物実測図(2)



1



2



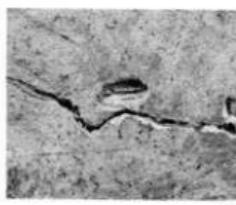
3



5



6



4



7



9



8



図版 出土遺物

仏像彫刻緊急実態調査略報Ⅱ

調査員 渡辺洋一、佐藤 泰（仙台市博物館学芸員）

調査補助員 岡崎修子（東北大学文学部OG）

岩佐光時（東北大学文学部東洋日本美術史研究室研究生）

仏像彫刻の調査は昨年度に引き続き2ヶ年目に当るが、今年度は、昨年度が指定物件中心の調査に重点をおいたのに対し、昨年度精査には至らなかった各寺院の本尊を主眼とし、これまたあまり知られていなかった物件の洗い出し調査を行なった。

調査に当っては、仙台市教育委員会社会教育課文化財管理係が主体となり、仙台市博物館学芸室、東北大学文学部東洋日本美術史研究室の協力を得てこれを行なった。また調査上の疑問点その他については、仙台市文化財保護委員会委員田代東北大学名誉教授及び、仙台市博物館学芸室長浜田直嗣氏の指導を受けた。

〈調査概要〉

今年度は、下表で示したように、15件89幅（うち35幅を精査）の調査を行なった（仙岳院について別記）。

昭和56年度仏像彫刻調査実施箇所一覧表

(○印は精査)

寺社名	調査日	調査員	補助員	仏像	年代	備考
萬葉寺	56.5.8 6.15	渡辺洋一 佐藤泰	岡崎修子	○阿弥陀如来立像（本尊） ○十一面觀音（脇侍） 宝戒、白象牙、如意、普賢、藥師 葉上、三昧、定自在王、大威德 釋迦、獅子吼、金戒、大自在王、 光明、山瀧虎、月光王、無邊身、 陀羅尼、日照王、虛空藏、聖觀世音、 勢至、藥王、藥光王、金剛藏、法自在王 ○阿彌陀如來立像 地藏菩薩立像 介財天立像	江戸後期 * 南北朝 江戸 *	平成六社 坐像 2 幅（聖觀音・勢至） 立像 25 幅 (うち半数は後捕)
成當寺	5.14	渡辺・佐藤	岡崎	○阿彌陀如來立像（本尊） ○空觀世音菩薩立像（脇侍） ○釋迦如來立像 地藏菩薩立像 聖觀世音菩薩立像 空觀世音菩薩立像	江戸前中期 * * 江戸後期 * 平安後期	元様模の作か? 本尊と同・作 * 仙台三十二番札所祇園寺 十六番札所本尊。宮城県指定有形文化財（昭49.4.30指定）昭和35年度精査

寺社名	調査日	調査員	補助員	仏像	年代	備考
大法寺	5.25 12.16	渡辺	岡崎	○阿弥陀如来坐像（本尊） 地藏菩薩立像 誕生佛	江戸前期 江戸後期 不詳	万治頃の作か? 金銅仏
大梅寺	5.28	渡辺・佐藤	岡崎 岩佐光晴	○釈迦如來立像（本尊） ○毘沙門天立像 ○地蔵菩薩立像	鎌倉後期 南北朝 江戸前期	元禄頃の作か? 昭和55年度査定
大潤寺	6.1	渡辺	岡崎・岩佐	釈迦如來坐像（本尊） 聖觀音菩薩 文殊菩薩立像 ○唐牛頭菩薩坐像 ○月光菩薩立像 ○日光菩薩立像 毘沙門天立像 不動明王立像 千手佛	現代 * 江戸後期 中世 江戸前期 * * * * 近世	戦後の作 * 唐空觀音本尊 万治頃の作か *
光明寺	6.11	渡辺	岡崎	○千手觀音菩薩立像（本尊） 聖觀音菩薩立像（協侍） 聖觀音菩薩立像（+） 地藏菩薩立像	江戸 * * 江戸後期	後浦（昭47） * * * *
正栄寺	6.12	渡辺	岡崎・岩佐	○阿彌陀如來立像（本尊） 龍樹菩薩坐像	中世 江戸	
保春院	6.17	渡辺	岡崎	○聖觀音菩薩坐像（本尊） 不動明王立像	江戸中期 江戸	正徳4年の作（寺伝）
愛宕神社	6.18	渡辺	岡崎	○大天狗坐像 ○烏天狗坐像	江戸後期 *	仁王門内（向って右） * （向って左） 仁王門拂札に文化元年の 銘あり
円徳寺	6.19	渡辺	岡崎	○阿彌陀如來立像（本尊） ○聖觀音菩薩坐像（協侍） ○勢至菩薩坐像（+）	桃山 * * 江戸	慶長二年の墨書き 本尊と同作 *
正円寺	6.23	渡辺	岡崎	阿彌陀如來立像（本尊） 聖觀音菩薩坐像（協侍） 勢至菩薩坐像（+） ○愛宕尊像 ○六地藏菩薩立像 檀陀・宝珠・宝印・持地・除蓋障 日光	江戸 * * * 江戸中期 *	本尊と同一作 * 享保元年の墨書き札あり
昌繁寺	6.25	渡辺	岡崎	阿彌陀如來立像（本尊） 聖觀音菩薩立像（協侍） 勢至菩薩坐像（+） 阿彌陀如來立像 阿彌陀如來坐像 釈迦如來坐像 ○十一面觀音菩薩立像	江戸 * * 中世 江戸 鎌倉	後浦あり 秘仏 仙台三十三番札所觀音九 番札所本尊 後浦（高村光雲揮作）

寺社名	調査日	調査員	補助員	仏像	年代	備考
仙居院						
満願寺	8.21	渡辺		阿弥陀如来立像 聖觀世音菩薩坐像 ○聖觀世音菩薩坐像	江戸 中世 江戸中期	金銅仏 元々懸仏であつたもの? 元文四年の銘(附子延部)
祐善寺	9.16	渡辺	岡崎	阿弥陀如来立像(木座) ○聖觀世音菩薩坐像	不詳 江戸	仙台三十三番札所總會 十九番札所本尊
能宝寺	11.12	渡辺	岩佐	阿彌陀如來立像(木座) 釋迦菩薩坐像(結侍) 文殊菩薩坐像(+)	鎌倉 江戸初期 +	清涼寺仏 国指定重要文化財(昭36.4.15指定) 東北大文学部東洋 日本美術史研究会助 手須藤仁氏同行

今年度の調査では、鎌倉時代の作と考えられる大梅寺本尊阿彌陀如來立像(写真1)、昌繁寺藏の十一面觀世音菩薩立像(写真2)、南北朝時代頃の作と考えられる報恩寺藏の阿彌陀如來立像(写真3)、大梅寺藏の毘沙門天立像(写真4)、そして時代までは規定出来ないが構造その他から見て中世の作と考えられるものに大満寺藏の虚空蔵菩薩坐像(写真5)、正樂寺本尊阿彌陀如來立像(写真6)など10軒の存在が明らかとなった。これらのなかには秘仏であるため詳細な調査をなし得ないものもあったが、今回の調査で初めてその実態を明らかにした物件がほとんどであった。

また、円徳寺本尊阿彌陀三尊像(写真7)や、正圓寺藏の愛宕尊像・六地蔵菩薩立像(写真8)のように像内に墨書き銘があって、その製作年代・作者の明らかなものもあった。

そのほか他ではあまり類例のない物件としては、上記の正圓寺の愛宕尊像のほかに愛宕神社の大狗像(写真9・10)、報恩寺本尊の半丈六の阿彌陀如來立像と二十五菩薩(写真11)などが挙げられる。

ところで、これらの調査に当っては下記に示した所有者である寺院・神社の御好意に依るところが大きく、この場を借りて心から感謝申し上げる次第である。

愛宕神社・円徳寺・光明寺・正圓寺・成覚寺・昌繁寺・正樂寺・大梅寺・大法寺・大満寺

報恩寺・保春院・満願寺・祐善寺・龍宝寺

（註）

1. 「仏像彫刻緊急実態調査略報」（仙台市文化財調査報告書第28集「年報2」収録）参照
2. 高村光雲の手による後補が成されている。
3. 定義如来と通称されている。
4. 向山虚空藏堂本尊で秘仏として十二年に一度丑年に御開帳があるのみである。
5. 背面背蓋内ぐり部分と仏頭内ぐり内の2ヶ所に「慶長二年大仏師宗印及び善三郎作」の墨書銘がある。
6. 愛宕尊像脇内に享保元年に愛宕尊及び六地蔵を製作した折の由来を記した墨書銘木札が入っている。
7. 天狗像の安置されている仁王門の棟札に文化元年の銘が見えることから、この像はこの時の作と考えられる。

写 真



写真 1



写真 2



写真 3



写真 4



写真5



写真7



写真6



写真9



写真8



写真10



写真11

仙岳院仏像調査概報

昨年度実行なっている仏像彫刻緊急実態調査の一環として昭和54年12月に行なった仙岳院の予備調査において、仙岳院は在寺院中最も仏像彫刻の数が多く、しかもその種類が多彩であることがわかった。そこで本年度、仙岳院住職吉田正賢氏の好意により、仙台市博物館及び東北大文学部東洋日本美術史研究室の協力を得て本調査を実施した。

ここに記したのはその調査結果の概報である。

調査期間：昭和56年7月29日～31日・同年8月3日～7日の実働8日間（うち調査6日間・整理2日間）

調査員：渡辺洋一・佐藤泰（仙台市博物館学芸員）

調査補助員：岡崎修子（東北大文学部OG）、岩佐光晴（東北大文学部東洋日本美術史研究室研究生）・佐藤英子（東北学院大学文学部学部史学科学生）

調査対象：仙岳院所蔵の仏像彫刻・仏画（前半4日間が彫刻・後半2日間が仏画の調査）

なお、調査上出た疑問点その他については、仙台市博物館の浜田直嗣学芸室長の指導助言を受けた。

調査概要

仙岳院は今回の調査結果を見てもわかるように、在寺院では珍しく数多くの仏像・仏画を所蔵している。これは仙岳院が天台宗の寺院であり、そもそも密教系寺院がその教理からも比較的多くの仏像・仏画を必要とするということもあるが、その大きな原因として仙岳院が藩政時代東照宮別当寺として寺領五十貫文七人扶を領し、仙台藩御一門格寺院の筆頭に位置した藩中有数の大寺院で、伊達家をはじめとした家中の重臣等からその多くが寄進されたことがあげられる。⁽¹³⁾

従って、必然的に江戸時代の作が大半を占めることになるのだが、上記の理由からその由緒製作年代、作者のはっきりしているものも多く、仙台における近世の基準作になり得る貴重な資料であるといえよう。

1. 仏像彫刻

仙岳院所蔵の仏像彫刻の総数は131軀を数え、しかも表1で示したとおり如来部像・菩薩部像・明王部像・天部像・肖像など多種多彩であり、中には刀八毘沙門天坐像（No.62・写真20）、烏枢⁽⁴⁾沙摩明王立像（No.20：写真21）、茶古尼天坐像（No.22：写真22）等といった他ではあまり見ることの出来ない類例もある。⁽⁵⁾

しかしこれらの中には最近作もかなりあり、今回は明らかに近世以前の作と思われる62軀について精査を行なった（表2）。

またこの中には諸政時代の別当社であった東照宮境内にあり、明治初年に廃された薬師堂の持仏もふくまれている。

その主なものには次のようなものがある。

表1 仙岳院所蔵彫像一覧表

種類	題名	番号	備考	種類	題名	番号	備考
如意部 (27幅)	釈迦如意(4)	0		天部 (9幅)	黒沙門天立像(2)	1	No31
	* 坐像(10)	1	No55		見身沙門天立像(2)	1	
阿弥陀如意(7)	0				刀八足沙門天立像(1)	0	No62
	* 坐像(3)	3	No28, 43, 58				
菩薩如意(1)	菩薩如意坐像(1)	1	No1	弁財天(1)	弁財天坐像(1)	1	No23
大日如意(2)	大日如意坐像(2)	0		吉祥天(1)	吉祥天坐像(1)	1	No47
青龍部 (47幅)	聖觀音立像(7)	4	No33, 35, 37, 38	大黒天(1)	大黒天立像(1)	1	No53
	* 坐像(3)	2	No24, 42	荼吉尼天(1)	荼吉尼天坐像(1)	1	No22
	十一面觀音立像(4)	2	No21, 30	神将(1)	十神將(12)	12	No4~15
	* 金剛(1)	1	No40	神將(27幅)	青龍天(6)		
	千手觀音立像(1)	1	No46		青龍天(6)		
	* 坐像(1)	1	No45		青龍天(6)		
	如意輪觀音坐像(2)	1	No49		青龍天(6)		
	馬頭觀音坐像(1)	1	No19		青龍天(6)		
	子安觀音坐像(1)	1	No29		青龍天(6)		
	白衣觀音立像(1)	0			青龍天(6)		
	觀音立像(2)	0			青龍天(6)		
	* 坐像(1)	0			青龍天(6)		
文殊部(3)	文殊菩薩坐像(1)	0			青龍天(6)		
	* 坐像(2)	2	No27, 57		青龍天(6)		
菩薩部(3)	菩薩菩薩坐像(3)	1	No56		青龍天(6)		
勢至部(2)	勢至菩薩坐像(2)	0			青龍天(6)		
地藏部(9)	地藏菩薩立像(1)	1	No34		青龍天(6)		
	* 坐像(6)	1	No36		青龍天(6)		
	子安地藏菩薩坐像(2)	0			青龍天(6)		
虚空蔵部(1)	虚空蔵菩薩坐像(1)	0			青龍天(6)		
阿彌陀部(2)	阿彌陀坐像(1)	0			青龍天(6)		
	* 坐像(1)	0			青龍天(6)		
日光部(1)	日光菩薩坐像(1)	1	No2		青龍天(6)		
月光部(1)	月光菩薩立像(1)	1	No3		青龍天(6)		
不動部(3)	不動明王立像(2)	1	No50		青龍天(6)		
	* 坐像(1)	1	No25		青龍天(6)		
金剛界(2)	金剛夜叉明王坐像(2)	1	No18		青龍天(6)		
草薙劍(1)	草薙劍明王坐像(1)	1	No17		青龍天(6)		
大威德(1)	大威德明王坐像(1)	1	No16		青龍天(6)		
烏恵(2)	烏恵沙彌坐像(1)	1	No20		青龍天(6)		
合計 131 幅							

・釈迦三尊像 (No55・56・57)

本尊釈迦如來坐像 (No55: 写真1) は菩薩菩薩坐像 (No56: 写真2), 文殊菩薩坐像 (No57: 写真3) を脇侍に持つ三尊形式の彫像で、本堂中央須弥壇に安置されている。

三幅とも玉眼入檜材寄木造りで、下地漆金泥塗が施されているが、釈迦如來の背面は金泥が省略されて下地の朱漆がむき出しになった近世独得の手法が用いられている。

元々一軸とも像底部に「自性庵智丈」という作者銘が記されてあったが、最近の修理の際に上塗りでつぶされ、本尊のみにそのあとで朱で銘を書き直している。

寺伝によるとこの作者は不動三尊像(№50・51・52:写真25・26・27)の作者と同一人物で、仙岳院堂宇の建替えの成された江戸中期(明和2年頃)⁽¹⁷⁾の作と考えられる。

・旧東照宮薬師堂持仏

薬師如来坐像1軸:厨子共(№1:写真4)、十二神将立像12軸(№4~14:写真8~19)、日光菩薩立像1軸(№2:写真5)、月光菩薩立像1軸(№3:写真6)、薬師三尊像:懸仏1面(写真7)

現在仙岳院本堂東側に安置されているこれらの仏像は、承応3年(1654年)二代藩主伊達忠宗により建立された東照宮の一宇薬師堂に安置されていたものを神仏分離の際に仙岳院へ遷仏したものである。

このうち薬師如来坐像は薬師堂の本尊であったものと思われ、透き漆(内部は金箔押)塗の厨子に収められている。この像の底部の墨書銘によると、東照宮建立前年の承応2年(1653年)に真壁五左衛門尉正家なる人物が仏師左京に作仏させ奉納したとあることから、東照宮の創建された江戸初期の作と見ることが出来よう。

またその脇侍仏として同堂に安置されていたものと思われる十二神将立像12軸、日光・月光・両菩薩立像各1軸があり、これらも十二神将のうちの招社羅大將(戌神將:以下大將略:写真18)の台座底部に薬師如來同様の銘文が見えること、これらの作風が同様であることから見て薬師如來と同時作と考えることが出来よう。また、十二神將の中には伏折羅(丑神將:写真9)に安政二年(1856年)の修理銘が、宮尾羅(子神將:写真8)、安庭羅(卯神將:写真11)、毘鷲羅(亥神將:写真19)そして前記の招社羅には文久2年(1862年)の修理銘が見え、江戸末期⁽¹⁸⁾の修理が成されたことがわかる。

これらは全て千眼入り檜材寄木造りで、薬師如來は胡粉の上に金泥塗切金の手法が取り入れられているほか、脇侍仏は全て胡粉の上に極彩色の仕上がりが成されている。なお十二神將の江戸末期の修理は彩色部分に古い部分と新しい部分とが見えることから、主に胡粉彩色の像によく見られる彩色部分の剥落部の補修ではないかと考えられ、日光・月光両菩薩の後補部分もこの折のものと思われる。

・觀世音菩薩像(破損仏:№29:写真24)

現存するのは面部から胸部にかけての前半分のみであり、これから想像して像高2尺余の正面入寄木造りの坐像であった可能性がある。材質は檜材で以前は下地漆胡粉彩色がほどこされていたと思われる名残りがある。

破損仏であるとはいって、残存部裏面内ぐり部分に「元文四年己未二月廿七日、奉建立子安觀

世音菩薩」という江戸中期の墨書きを有する点など近世仏の構造等を知る上で貴重な資料である。

・十一面觀世音菩薩坐像（No30：写真23）

この像は仙台三十三番札所観音十一番札所本尊で別名「小萩觀音」といわれる。

現状は頭部から胸部にかけて当初の部材が残っているほかは原形をとどめない程度まで後補がなされており詳細は不明であるが、残存する当初の部材部分から見て、元々は彫眼ハリギリ材一本作りの半像で、像の構造及び材質等から見て、その製作年代は中世以前まで遡り得る可能性もあり、仙岳院所蔵仏中最古の彫像と考えてもさしつかえなかろう。

・不動三尊像

仙岳院所蔵仏中最大の彫像である不動明王立像は制吒迦童子立像（写真25）、矜羯羅童子立像（写真27）を脇侍とした三尊形式を有し、本堂中央須弥壇東わきに安置されている。寺伝によると仙岳院の堂宇の延替られた明和2年頃の作とされている。

三軀とも檜材寄木造りで、像全体に紙張漆喰の手法が用いられている。このうち不動明王・制吒迦童子が玉眼、矜羯羅童子が彫眼となっているが、三軀とも後補部分があることから、矜羯羅童子の彫眼は元々玉眼であったものを後補の際つぶして彫眼の形にしたものではないかと考えることが出来る。¹¹⁾

（註）

1. 「仏像彫刻緊急実態調査略報」（仙台市文化財調査報告書第28集「年報2」収録）参照
2. 仙岳院藏「御供領井配當日録」（明暦元年乙未五月十七日付）による。なお仙台藩では石高制を用いて貢賦制がそのまま残った。
3. 仙台藩では寺院の格式により御一門格（仙岳院ほか17ヶ寺）、至返上格（松音寺ほか3ヶ寺）、着座格（阿勢寺ほか25ヶ寺）、胥出格（大願寺ほか23ヶ寺）、無格と所級がはっきりしていた。
4. 兜毘毘沙門大（京都の教王護國寺等に例がある）の異形として中止以降作られるようになったもので、仙岳院藏の像は獅子に騎し武装忿怒形をした三面八臂の構造を有す。
5. 鳥越承磨明干ともいい、後の金にて練して一切の汚れ・悪を淨化する魔力を有するとされ、天台密教では五大明王（不動・降三世・草茶利・金剛夜叉・大威德の五つの明王を指す）中の金剛夜叉明王の代りに北方に配される場合もあるが、主として単独で信仰され剣の前に配され便所神と同様に扱われる場合もある。元末彫像が多く、肉像としてはよく見られるが仙岳院の像のように彫像として現存するのは稀である。
6. 元々ヒンズー教の女神カーリーの侍女で人肉を食べる夜叉の一種であったものが仏教に取り入れられ、後には船荷大明神の本地仏となる。仙岳院の像は白孤に騎した姫像風の像で彫眼一本造りで像全体は胡粉彩色が成され、納衣には切金の手法が取り入れられている。
7. 東照宮が東照大権現（徳川家康）百五拾年の法会にあたり修理を行なっているが（「仙台東照宮本殿より発見された墨書きについて」前掲書参照）、これと前後して別当寺である仙岳院も修理が成されていることは仙岳院に現存する焼札により明らかである。
8. 特に鬼押絆の台座内側には「文久二年十二月仏師勇之助」という修理者の墨書きがある。
9. 頭料の種類その他を見て古提人形に見られる手法と同様の手法が用いられているものと考えられる。
10. 像全体の50%～60%は後世の補修により部材が替えられている。
11. その反対も可能。

表2 仙岳院 仏像彫刻

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9
名 称	著者不明	元音鏡立像	月光菩薩立像	十一面觀音立像	毘盧遮那佛坐像	迦陵頻大持子	密迹羅大持子	密迹羅大持子	密迹羅大持子
時 代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代	後奈良時代
記 錄	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明	著者不明
用 材	木	木	木	木	木	木	木	木	木
特 質	刀身、等身造	刀身、左							
所 見	頭髪彩色 頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	胡粉 頭粉の底の模 跡あり							
備 考	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧	頭十小仏仔のため 文様がよく残る 斧
電 底	31.4	45.9	39.2	49.1	52.8	49.3	49.3	48.3	49.4
頭 粉	27.2	32.5	30.5	35.0	39.3	35.2	35.2	35.0	35.3
面 粉	11.0	12.9	10.1	13.3	11.0	10.5	10.5	9.8	9.8
面 真	7.1	5.9	5.4	6.4	6.7	6.8	6.8	6.1	6.1
面 山	6.6	5.2	5.1	5.8	5.6	5.9	5.4	5.5	5.3
耳 真	8.4	—	—	7.3	—	7.0	—	7.9	7.1
面部	8.3	6.3	6.3	8.6	9.4	7.7	8.3	8.2	8.2
口 頬	15.9	12.1	11.8	—	—	16.0	—	—	—
脣 溝	22.0	16.1	15.5	—	—	—	—	—	—
頬 孔	—	—	—	—	—	—	—	—	—
胸 孔	9.3	7.2	—	—	—	—	—	—	—
腹 孔	10.5	—	—	10.7	10.5	10.6	10.2	9.8	9.9
腰 孔	—	—	—	—	—	—	—	—	—
脚 孔	25.5	25.4	—	—	—	—	—	—	—
腰 帯	26.3	—	—	—	—	—	—	—	—
腰 帶	33.5	—	10.5	10.7	—	18.6	18.6	17.0	17.0
台座	29.6	—	27.4	27.1	7.0	7.0	7.0	7.0	7.0
光背区	47.6	—	—	—	16.5	16.5	16.5	18.7	18.5
	35.4	—	—	—	—	—	—	25.0	—

No.	10	11	12	13	14	15	16	17	18
名 称	流光羅人持 火	雲蒸羅人持 火	霞蒸羅人持 火	霞光羅大持 火	霞光羅大持 火	霞光羅大持 火	霞光羅大持 火	霞光羅大持 火	霞光羅大持 火
時 代	古風								
記 銘	吉野 ひつ吉 治政年 たつ								
用 材	質 純 玉器、切木漆 漆								
所 見	古 神龜形								
傳 送	52.2	51.3	51.3	50.1	50.1	49.4	49.4	49.4	52.4
傳 送	45.3	44.8	45.1	44.0	44.0	45.6	45.6	45.6	46.6
傳 送	14.3	12.8	12.8	10.3	13.4	11.0	11.0	13.0	12.9
傳 送	6.0	5.0	5.0	5.0	6.3	6.9	6.9	6.5	6.7
傳 送	6.1	6.1	6.0	5.5	5.8	5.7	5.7	6.1	5.9
傳 送	7.9	7.7	7.7	7.4	7.4	7.7	7.7	7.7	7.0
傳 送	7.3	7.5	9.5	7.5	7.5	7.8	8.4	7.7	7.7
傳 送	15.5	15.6	15.6	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7	14.7
傳 送	12.5	13.1	12.3	11.9	12.3	12.3	12.3	12.3	11.6
傳 送	10.3	10.4	10.1	11.0	11.0	10.0	10.0	10.4	8.7
傳 送	10.6	10.5	9.8	11.5	11.5	11.2	11.2	10.1	9.3
傳 送	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳 送	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳 送	—	—	—	—	—	—	—	—	—
傳 送	—	—	—	—	—	—	—	—	—
光 背	18.6	—	—	18.8	18.8	18.7	18.7	18.8	—

No.	19	20	21	22	23	24	25	26	27
名 称	馬頭観音(金)	地蔵菩薩(正)(素面把出廿番)	十一面觀音	青尼天弁附火	青尼天弁附火	青尼天弁附火	不動三尊	取観音(坐)	文殊(坐)
時 代									
記 紹		昭子真圓 式範院(作)							
用 材								昭子内台座	
特 殊	玉 鉢	左	四 左	五 鉢	白木一本造	金 仏			
所 見	純金 切削 柄身金端 端部内ぐりあり 全体内ぐりなし	三頭一一面六臂 第六頭を出し ドクロを以てのせ また寶持とドクロ 彩色あり	絶版 衣部に数金がわ すかに残る 河合式大掛 右千手第一指 露頭(露頭)久遠 原(原)は保存寺式 の梵形 元げなし	涅槃 腰巻 腰巻 腰巻	八臂像 まめ、頭袋、唇に 斜角、衣に數金を かく、 口には舌脱 彩色 露子には脚人が懸 がれる	まめ、日、13、ひ のろひの形容で他が とくろうとく形で 衣服部分は腰巻 地蔵院もおもい頂 に新羅 金留止打の模跡 あり	衣は山形 油墨書面で金泥 墨書きをつける と。施無印 右手に持物をとる 左耳が持物は挿入 施無印	第十卷上に選ず 第十卷上に選ず 第十卷上に選ず	
寸 宽	37.5	27.6	27.7	19.0	19.0	18.0		15.5	15.0
高 度	31.3	—	22.7	—	—	—		—	—
面 長	16.7	—	—	—	—	—		—	—
面 幅	9.0	—	—	—	—	—		—	—
法 身	7.3	—	—	—	—	—		—	—
耳 一耳	—	—	—	—	—	—		—	—
目 高	11.5	—	—	—	—	—		—	—
耳 高	—	—	—	—	—	—		—	—
頭 高	(横大)31.5	—	—	—	—	—		—	—
胸 高	—	—	—	—	—	—		—	—
脚 高	10.3	—	—	—	—	—		—	—
體 高	—	—	—	—	—	—		—	—
頭 高	—	—	—	—	—	—		—	—
法 身	25.5	—	—	—	—	—		—	—
頭 高 (左)	5.0	—	4.2	—	7.8	—	5.5	—	12.2
台座高	—	—	—	—	—	—	—	—	6.0
兜座高	—	—	—	—	—	—	—	—	30.0

No.	28	29	30	31	32	33	34	35
名 時 代	阿弥陀如來(金)子安紀 銘	經掛山 御物内閣 元文 四年の事跡あり	十一面觀音 黒沙門天	迦陵頻 度子像	迦陵頻 度子像	迦陵頻 度立像	迦陵頻 度立像	迦陵頻 度立像
用 材			かづら?	ひのき 柳				
特 質 所 見	木頭 玉頭	金像形式と被定で 見る 白木頭	墨竹筆 作の 墨竹筆	金頭 金足	木頭のままで 剥落	剥落、ト地金頭 左脚剥落 右足尖 口垂 右脚の玉頭露出 体部剥落 左脚後脚 右脚後脚 右脚後脚	剥落、ト地金頭 左脚剥落 右足尖 口垂 右脚の玉頭露出 体部剥落 右脚後脚 右脚後脚	剥落、ト地金頭 左脚剥落 右足尖 口垂 右脚の玉頭露出 体部剥落 右脚後脚 右脚後脚
量	34.5	30.0	31.5	30.6	20.4	18.9	19.1	18.5
身 長	13.5	9.0	9.5	11.5	—	—	73.5	76.2
頭 巾	7.5	5.2	5.2	—	3.6	—	20.7	10.0
耳 根	8.8	6.5	6.5	—	5.1	—	—	—
目 鏡	10.0	—	—	—	10.4	—	—	—
鼻 鏡	17.5	—	—	—	—	—	10.3	6.0
口 鏡	22.8	—	—	—	—	—	—	—
耳 鏡	11.5	—	—	—	6.6	—	—	—
眼 鏡	12.5	—	—	—	—	—	—	—
額 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
頭 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
足 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
腰 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
胸 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
背 鏡	—	—	—	—	—	—	—	—
腰 帶	—	—	—	—	—	—	—	—
腰 袋	—	—	—	—	—	—	—	—
腰 袋	(左) 5.3	—	—	—	—	—	11.6	15.8
腰 袋	—	—	—	—	—	—	(中) 27.0	(中) 19.0
腰 袋	—	—	—	—	—	—	—	65.5
腰 袋	—	—	—	—	—	—	(中) 18.5	(中) 104.7

No.	地名	姓氏	型別	音韻	意	聲	子	傳	十一面觀音像	十一面觀音像	聖観音像	菩薩像	武神像	
時代	36	37	38	39	40	41	42	43	44					
記述														
用材	柏木か	柏												
特質	日本杉		高頭、一本脚				施山、一小塔	玉頭、玉頭	古朴而富圓滿感	貴氣は如未形	「彌久」			
所見			施山の頭は妻頭 女に成木をよく 萬年の妻半にも現 る夫に成木をよく 妻頭にはほとんど見 れぬ。施山の頭は妻 頭、施山も妻頭、妻 頭から成り、夫と妻 の妻頭と夫頭で現 さもあり、姓頭と夫頭 の妻頭は妻頭。二子は妻 頭は妻頭。妻頭は妻頭 の妻頭は妻頭。妻頭は妻頭 の妻頭は妻頭。	妻頭欠 夫頭欠 妻頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 妻頭先失 夫頭先失 妻頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失 夫頭先失	玉頭、白頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠 夫頭欠		施山は妻頭	貴氣は如未形	貴氣は如未形 頭子を欠損 頭が不明	「彌久」				
高さ	22.5	(例題一)	43.8	61.8	21.3	41.7	30.7	(8.28kg)50.2	11.3	9.8				
幅長			30.3	50.7	31.3	31.3	28.0	29.0						
高比			9.1	6.7	5.1	10.8	7.1							
幅比			4.6	6.7			9.1							
高底			4.7	5.8			4.4							
幅底			5.8	7.7			8.3							
高身			6.2	8.0			6.7							
幅身			10.2	13.5			13.7							
腰身			5.6	9.4			6.7							
腰厚			6.7	11.8			5.1							
腹厚							8.5							
背高							5.7							
背厚							10.5							
側厚							1.9							
天井高							5.3							
天井厚							5.7							
脚張							29.9							
脚張							10.9							
頭高							29.3							
頭高							12.3							
天井高														
天井厚														
		51.5												

名	姓	子・半綱音出處	子・半綱音立場	由作大立掌	天狗像	如意輪觀音	不動明王文殊	持拂藏	新	御機御子	大藏	天
時	代											
桂	跡											
川	村											
柳	實	玉頭、等本近 足尖	飞眼	刻頭、一本近	刻頭、一本近	工頭	玉頭、等本近	ひねき				ひのかき?
所	見	内部分金光丸 強豪衣部形容色 眉朱朴、胡鬚顔 面白大、深酒面 三面火 石1脚、左10脚 通油脂油、燒油少	金光 頭上而、右胸右 一面火、右足尖火 二面火 石1脚、左10脚 通油脂油、燒油少	八臂像 左足尖火 右足尖火 金光倒流	金九佛 右、臂、八一臂佛 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	内斜火 头、足尖火 (後流火)、頭 頭、頭	
曾	高	27.5	44.2	13.5	37.5	19.1	10.6	27.3	29.8	36.7	36.7	
曾	高	29.2	37.0	11.5	37.5	19.1	10.6	29.3	30.3	31.1	30.3	
曾	高	16.2	16.8	—	—	—	8.3	20.1	—	—	10.3	
法	行	8.9	4.8	—	—	—	3.2	14.0	—	—	—	
法	行	10	7.4	4.5	—	—	3.8	—	11.8	8.2	8.0	
法	行	11	8.3	5.3	—	—	3.6	15.7	—	—	—	
通	高	9.6	5.5	—	—	—	5.7	17.1	11.0	—	10.6	
通	高	17.5	—	—	—	—	—	34.1	—	—	38.5	
通	高	15.4	—	—	—	—	—	—	26.2	19.6	24.5	
通	高	10.9	6.2	—	—	—	18.3	11.2	—	—	17.5	
通	高	12.2	7.3	—	—	—	19.3	11.5	—	—	10.6	
通	高	—	—	—	—	—	—	—	—	—	12.7	
通	高	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
通	高	27.0	8.0	—	—	—	12.7	—	—	—	—	
通	高	(27.0)	8.0	—	—	—	4.0	—	—	—	—	
通	高	—	6.0	—	—	—	—	—	—	—	—	
通	高	—	8.0	—	—	—	—	—	—	—	—	
通	高	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
通	高	53.6	—	—	—	—	22.7	—	—	—	—	
通	高	(53.6)	—	—	—	—	45.5	17.0	—	—	—	
通	高	24.5	—	—	—	—	45.5	74.5	—	—	—	
通	高	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	

〔通字数〕7.1

2. 仏画

仙岳院所蔵絵画中、今回調査したものは71点あり、全て軸表装のものである。

内容別に分類すると、曼荼羅に類するもの10幅、如来像13幅、觀音像6幅、金剛像2幅、明王像3幅、天部像15幅、垂迹部に属する像7幅、祖師像及び肖像13幅、その他2幅となる。このうち如来像として一括したが、特殊なものとして涅槃像2、阿弥陀来迎図2、の内訳がある。

また成立年代を大別すると、ほぼ三期にわけることができる。即ち、仙岳院創建以前（江戸時代初頭以前）、創建当初～江戸時代中期、江戸時代後期～明治時代がそれである。このうち遺品が最も多くまた種類も多様なのが、第Ⅲ期であると言える。伊達家祈願所として多岐にわたる修法が行われた時代であったとも推察される。これに対して第Ⅰ期に比定される遺品は、修法に際して必要とされた图像というよりは、むしろ、個人所有の鑑賞用絵画の傾向がうかがえる。また前後するが、第Ⅱ期に属する图像は、仙岳院が中尊寺別当を長く務めているところから、中尊寺からの将来品である可能性も十分に考えられる。ともあれ、これら遺品の質及び量的な変化が藩政時代の歴史的推移と照合して、興味深いものがある。以下に主なるものをとりあげ、概説を加えてみる。

表3 仙岳院仏画

No.	名 称	作 者	材 質	油 畳	紙 畳	種 別
1	菩薩	慶山	絹本着色	67.5×144	及崎慶山	元文六年二月十三日吉宗公口等
2	小動項足尊像	大西良次	*	35.5×164.5	*	入野完全坪賀壽附之官仕物
3	聖樹樹士角	狩野周尚	*	131.9×75.2	探幽法眼六十一・武	華原樹士大樹物・解・狩野周尚(山川にあ)
4	虚空藏菩薩	*	*	55.5×130.5	*	文化八年丈五秋林勝樂新造之 虚空藏菩薩
5	涅槃像	絹本着色	93.5×168.5	*	*	
6	七佛羅刹	*	*	86.7×141.5	(裏面) 惠那山靈應院行年六十ニ年據書	
7	觀音像	当川重事	*	39.2×307.2	*	
8	金剛羅刹	*	紙本着色	54	×124	
9	觀音如意半跏像	狩野周尚	絹本着色	48.5×117.2	探幽 六十七年謹	
10	觀音如意十六眷神	*	絹本着色	60.5×114.3	*	
11	聖樹樹半跏像	絹本着色	73.4×91	笑月謹	*	
12	不動菩薩(坐像)	布 着色	72.2×116.3	*	*	
13	十二大光 天	*	紙本着色	40.6×103.5	*	
14	水 天	*	*	*	*	
15	毒蛇天	*	*	*	*	
16	月 天	*	*	*	*	
17	大 天	*	*	*	*	
18	多聞天	*	*	*	*	
19	星宿天	*	*	*	*	
20	風 天	*	*	*	*	
21	日 天	*	*	*	*	
22	地 天	*	*	*	*	
23	須彌天	*	*	*	*	
24	自在天	*	*	*	*	

No.	名 称	作 者	材 质	法 尺	釋 文	附 记
25	愛染明王像		楠木青色	19.4×41.1		
26	慈母觀音像		楠木根部	*		
27	藥師富像	了 理	*	39.8×96.7		
28	薦福院天狗像	東 澤	*	27.5×75.4		
29	伏藏大師富像		楠木青色	40 × 96.5		
30	空眼大師		楠木原木	27.5×62		號海山什物 朝慶十月二日可為供物
31	八地大師		楠木青色	49.5×101.5		
32	慈覺大師像		楠木青色	46 × 92.2		
33	天台大師		*	55.5×102	城三山弘道集	
34	惡惡大師		楠木青色	29.1×52.3		
35	良忠十八		楠木青色	45.5×103.5	請あり	號通慈覺大師皮丸所造
36	久祖大師		楠木青色	55.9×126.1		
37	天台大師		*	81.2×133.9		
38	山王権現像		楠木青色	41.7×100.5		山王権現像
39	五大草		布 青色	58.3×97.3		(内側) 聖闘山惠行物右附十四世孫通
40	比叡山毛王摩西		紙本青色	39 × 128.4	比叡権現役五位上把拂 成那	
41	四十九枝		楠木青色	51.0×92.2		
42	(聖説金剛經註出大藏)		*	89.0×108.5		
43	詔中阿彌陀		*	62.3×149.0	(裏側) 諸僧正光明夢想	詔中阿彌陀 千年
44	千手千眼觀自在尊		紙本青色	59.8×101.8		千手千眼觀自在尊
45	金剛薩埵		楠木青色	42.0×103.9		
46	智賢延命		紙本青色	32.8× 66.7		
47	八俱胝菩薩坐像		*	53.5×101		
48	*		*	53.7×101.6		
49	降魔大師		楠木原木	27.5×61.7		
50	妙義大師像		楠木青色	26.2× 61.0		
51	十六菩薩		*	26.5× 60.8		
52	秋葉大權現		*	26.0× 59.7		
53	釋迦牟尼		*	26.0× 59.7		
54	釋迦石窟觀音		拓本	38.0×146.0	圓覺寺印板	
55	三寶冠		楠木青色	39.0× 93.0	(裏側) 三寶大梵天尊像 釋迦牟尼	
56	三寶冠		紙本青色	40.7× 87.9		
57	金剛界大日如來	釋迦牟尼	*	38.0 × 87.0	(裏側) 御跡所神山宗密著應真 諸高	
58	十二天		*	34.6 × 133.7		
59	*		*	*		
60	能終弥陀來迎佛	能終	楠木青色	40.7×100.5		能終弥陀來迎佛 第一傳御佛
61	米 泡 因		*	33.2× 74.5		
62	白衣觀音	永真	*	42.3× 78.0	法眾名真華	
63	准 墓 像		*	35.5×106.1		
64	受戒三尊		楠木青色	32.2× 54.8		
65			*	32.2× 54.7		
66			*	32.2× 54.7		
67	愛染福(能成丈曾孫編)			120.0×319.2		
68	西界曼荼羅 藥藏界			115.2×122.4		
69	*	金剛界		116.5×123.8		
70	准輪閣			79.5×200.0		
71	當來曼荼羅		楠木刷色	177.5×168.0	光明淨土王在右門十益財に準輪閣の縁 かいたもの。身に附してある。木は記載	

来迎図（写真28）

阿弥陀如来を本尊とし観音・勢至両菩薩を脇侍とする三尊形式の迅雲來迎図で、ななめの構図をとり速度感を表現している。画面全体が黒ずんでおり、肉眼で細部まで観察することは困難とも言える。各尊の肉身の部分と観音菩薩が拂げる蓮台部分がはの白く浮き出しており、また主尊の衲衣の文様が黒線で認められる部分がある。

こういった様式の來迎図は鎌倉時代以降に描かれてきたと考えられており、顔料の状態・絹の保存状況なども考え合わせると、室町時代あたりに成立したものと推察できる。前傾する両菩薩、S字形の主尊のポーズなどにしなやかな筆致が認められ、極めて流麗な彫像であったことが想像される。

臨終弥陀來迎図（写真29）

阿弥陀如来一尊と四十八光線の光背のみで表現された來迎図で、この光線は阿弥陀仏の四十八大願を示している。守伝によると恵心僧都御真筆と伝えるが、來迎図の展開上で時代的な差異があり、肯定し難い。如来像の形式、顔料の残存度、材質の状態、などから考えても、室町末期～江戸初期あたりに位置するものであろう。

当摩曼荼羅（觀経曼荼羅）（写真30）

觀無量寿經に描かれる阿弥陀浄土の状景を絵画として表現したもので、鎌倉時代にはいつから盛行したものである。当摩寺にそれを忠実に描いたものが所蔵されたためこの呼称がある。仙岳院のものは紙本着色刷りで、着色が施されている。着色も入念で、一見しただけでは版本刷りと言えぬ程であり、色彩も古様で、江戸初期までのものと考えられる。

両界曼荼羅（写真31）

大日經を所依とする胎藏界曼荼羅と、金剛頂經を所依とする金剛界曼荼羅とから成り、空海が唐より持來した現國両界曼荼羅系のものである。両界曼荼羅中では小幅であるが古様を保っている。江戸初期までには成立していたものであろう。これら両界曼荼羅は密教寺院における本尊とも言うべきもので、東に胎藏界、西に金剛界を安置するならわしがある。

維摩居士像（写真32）

探幽法眼六十歳の落款がある（写真33）。また箱書には、「仙岳院什物而先年當國太守綱村吉村兩公此軸雖被懸望子細及貰上／依之村公狩野益信被仰付寫之此軸者永當院為重寶蒙不可紛失之命矣／眺海第十三世／慈寛法潤記之」と伝える。白描に近く、わずかに朱を用いた部分がある。筆の運びも流暢で力があり、探幽実作とみなしえる描写がある。

観迦如来坐像（写真34）

探幽「」六十七年畫の落款がある。虫害のため落款部分に欠損があり、明確に読みとれない。前出の維摩居士像に比べて、筆の流れがやや硬く脆弱な感じをまぬがれない。

不動明王尊像（写真35）

不動明王は、インド古来のシヴァ神が仏教にとり入れられ発展したものであり、密教寺院には欠くことのできない存在である。特に日本においてその信仰が盛んとなり、各時代を通じて造像されている。この図像は、不動明王が岩座を踏んで中央に立ち、制吒迦・矜羯羅二童子を従えるもので、最も典型的な図容であるが、形式に則りながら自由な筆さばきをみせており格調の高いものとなっている。また、矜羯羅童子の描写など、初期の肉筆浮世絵を彷彿とせるものがある。

〈参考文献〉

- ・仏像図典 佐和隆研編 吉川弘文館
- ・曼荼羅の世界 濱田隆著 美術出版社
- ・仏像の再発見 西村公朝著 吉川弘文館
- ・圖解・寺院めぐり必携〈大法輪道書〉 大法輪閣
- ・仏像圖鑑 紀秀信著 国書刊行会
- ・仏像調査緊急実態調査略報（仙台市文化財調査報告書第28集 年報2収録）
- ・仙台の社寺と教会 山本晃著（『仙台市史』巻7：別編5）
- ・宮城県寺院大総覧 宮城県寺院大総覧編纂会編

写真

仏像彫刻



写真1 普賢菩薩坐像



写真2 釈迦如來坐像
釈迦三尊像(本尊)



写真3 文殊菩薩坐像

旧東照宮藥師堂持仏



写真4
藥師三尊像(懸仏)



写真8
宮毘羅



写真9
伐折羅



写真10 迷企羅 写真11 安底羅



写真12
安底羅



写真13
頌僊羅



写真6 日光菩薩立像



写真5 藥師如來坐像



写真7 月光菩薩立像



写真14
因達羅



写真15
波夷羅



写真16
摩虎羅



写真17
真達羅



写真18
招杜羅



写真19
昆揭羅



写真20 刀八毘沙門天像



写真21
鳥梶瀧摩明王立像

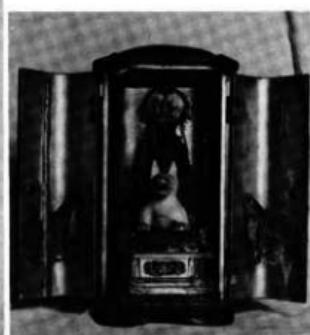


写真22 茶吉尼天像



写真23 十一面観音菩薩坐像



(表)
写真24 観世音菩薩像(破損仏)

(裏)

不動三尊像

写真25

制吒迦童子像 (左)

写真26

不動明王像 (中)

写真27

矜羯羅童子像 (右)





写真28 来迎図

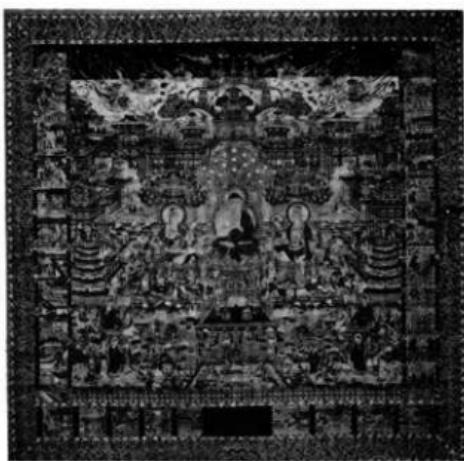


写真30 当摩曼荼羅



写真29
臨終弥陀像



写真30 胎藏界曼荼羅



写真31 金剛界曼荼羅

写真31 兩 界 曼 茶 羅



写真32 维摩居士像



写真33
维摩落款



写真34 釈迦如來像



写真35 不動明王尊影



写真36 虛空藏尊影



写真37 十二天曼荼羅

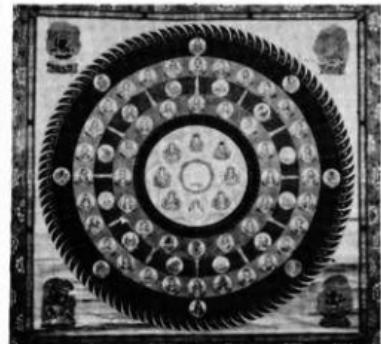


写真38 熾盛光曼荼羅



写真39 安鎮曼荼羅



写真40 涅槃図



写真41
帝釈天



写真42
火天



写真43
焰摩天



写真44
羅刹天



写真45
水天



写真46
風天



写真47
多聞天



写真48
白在天



写真49
梵天
十二天像



写真50
地天



写真51
日天



写真52
月天

職員録

社会教育課
 課長 永野益一
 主幹 幸坂春一
 文化財管理係
 係長 鈴木昭三郎
 上級主幹 木高文
 (10月1日昇勤)
 上級事務官 宏渡辺洋一
 文化財調査係
 係長(兼) 幸坂春一
 教諭 佐藤 隆
 渡辺 康彦
 佐藤 格
 加藤 正範
 主事 田中 明和
 結城 浩一
 成瀬 茂
 教諭 青沼 一民
 柳沢 みどり
 本村 浩二
 旗原 信彦
 佐藤 洋
 金森 実
 佐藤 中二
 吉岡 勝平
 工藤 喜司
 渡部 弘美
 主浜 光湖
 斎野 指彦
 長島 実一
 荒井 格
 間時職員 高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物雲原下セコイカ化石林調査報告書 (昭和39年4月)
 第2集 仙台城 (昭和42年3月)
 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書 (昭和43年3月)
 第4集 史跡陰陽分界寺跡発掘調査報告書 (昭和44年3月)
 第5集 仙台市南小泉法螺塚古墳調査報告書 (昭和47年8月)
 第6集 仙台市荒巻五本木石窓跡発掘調査報告書 (昭和48年10月)
 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書 (昭和49年3月)
 第8集 仙台市山尚山愛宕山横穴六群発掘調査報告書 (昭和49年5月)
 第9集 仙台市根岸町宗神寺横穴群発掘調査報告書 (昭和51年3月)
 第10集 仙台市中田町安久家遺跡発掘調査概報 (昭和51年3月)
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報 (昭和51年3月)
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報 (昭和52年3月)
 第13集 南小泉遺跡一帯明確化調査報告書一 (昭和53年3月)
 第14集 南小泉遺跡発掘調査報告書 (昭和54年3月)
 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報 (昭和54年3月)
 第16集 六反田遺跡発掘調査 (第2・3次) のあらまし (昭和54年3月)
 第17集 北電敷設跡 (昭和54年3月)
 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書 (昭和55年3月)
 第19集 仙台市地下鉄陽陽分布調査報告書 (昭和55年3月)
 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報 (昭和55年3月)
 第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1 (昭和55年3月)
 第22集 年報1 (昭和55年3月)
 第23集 年報1 (昭和55年3月)
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書 (昭和55年8月)
 第25集 二神峯遺跡発掘調査報告書 (昭和55年12月)
 第26集 先述遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報 (昭和56年3月)
 第27集 史跡陰陽分界寺跡昭和55年度発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第28集 年報2 (昭和56年3月)
 第29集 郡山遺跡I - 昭和56年度発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第30集 山田上・下道跡発掘調査概報 (昭和56年3月)
 第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告II (昭和56年3月)
 第32集 鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第33集 山口遺跡発掘調査報告書 (昭和56年3月)
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年12月)
 第35集 南小泉遺跡郡山市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年3月)
 第36集 北前道路発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第37集 仙台平野の遺跡群I - 昭和56年度発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第38集 郡山遺跡II - 昭和56年度発掘調査概報 (昭和57年3月)
 第39集 無沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年3月)
 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I (昭和57年3月)
 第41集 年報3 (昭和57年3月)

仙台市文化財調査報告書第41集

昭和56年度 年報 3

昭和57年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

